『列僊寿娯禄』が仕掛けた説話の擬似体験

――付.〈粗描〉久米仙人墜落説話利用略史――

中　前　正　志

一　日本版「選仙図」――京都女子大学図書館所蔵『列僊寿娯禄』

京都女子大学図書館に「列僊寿娯禄」と題する肉筆彩色の絵双六一枚が所蔵されている（請求記号798/R28　後掲図1・2参照）。作者は不明だが、作成年の方は、右上の欄外余白に「文政六歳癸未孟春」と墨書されているから、文政六年（一八二三）であると知れる。縦九〇・五糎×横一〇四糎というやや横長の画面を、縦六段×横十列に区画する。最上段の第一段は他の段よりも縦に少々長く、他の約一・三倍の長さになっている。最下段の第六段とその上の第五段を貫いて中央に設定された「ふり出し」が計四マス分を占め、第一段中央にある二つの上がり「福星」「寿星」が、各々三列を貫いていて、合わせて六マス分を占める。そして、それらを除く五十マスを、蓬莱山を画く第五・六段のふり出しから福星と寿星を画く最上段の上がりを目指して、コマが移動していくことになる。上端欄外に記されたタイトル「列僊寿娯禄」の通り、五十マスそれぞれには仙人が一名ずつカラフルにかなり巧みに画かれている。それら各マスの右端

部には、仙人名が漢字と平仮名の両様で記されてもいる。[1]

種々の物づくしの絵双六あるいはある分野の人物を集めて画いた絵双六は近世以降多く作成されたが、仙人を列べた絵双六というのは、高橋順二氏編『日本絵双六集成　新訂版』（柏美術出版、平6）や『東京都江戸東京博物館資料目録　双六』（同博物館、平13）、加藤康子氏・松村倫子氏編著『幕末・明治の絵双六』（国書刊行会、平14）、収蔵資料目録11『絵双六　入江コレクション1』（兵庫県立歴史博物館、平18）、学習院大学史料館所蔵史料目録20『小西四郎収集史料　絵双六』（学習院大学史料館、平18）を一覧しても、類似のものを見出し難い。例えば浄土双六の中には、西王母と東方朔を画いたマスが列んで見られる。そのように一部に仙人を列べたものはあっても、全体的に仙人ばかりを列べた絵双六は知られていないのではないかと思われる。ただ、それは日本に限った場合のことであって、中国には早くより類例が存在していたらしい。

大田南畝『南畝莠言』なども引用する記事だが、明代の『五雑組』（和刻本漢籍随筆集）巻六人部二に、

唐李部有二骰子選格一、宋劉蒙叟・楊億等有二彩選格一。即今陞官図也。諸戯之中最為二俚俗一。不レ知、尹洙・張訪諸公何以為レ之。不二一而足一、至三又有二選仙図・選仏図一、不レ足レ観レ矣。

と見える。唐代に生み出された「骰子選格」や宋代の「彩選格」が、今の「陞官図」だと説いているが、その「陞官図」とは「遊びの道具」で、「大小の官位、すなわち白丁より秀才・貢生・挙人・進士・太師・太傅・太保に至るまでを紙の上に列し、拈拈転児という独楽の形をした骰子を廻転させる。……そのあらわれた文字によって、進んだり退いたりして、早く太保に至ったものが勝となる」という、「わが邦の双六の如きものである」（平凡社東洋文庫617・注）ようだ。この「陞官図」に類するものとして、「選仏図」とともに「選仙図」が挙げられていることに注意したい。[2] それを使っての遊戯が宋代には実際に行われていたこと、次の如き記載によって確認されている。

尽日間窓賭選僊　小娃争覓到盆銭　上籌争占蓬莱島　一擲乗鸞出洞天

（王珪『宮詞』欽定四庫全書）

しかし、「陞官図」の実物が種々伝存し、さらに今なお作成・使用されてもいるのに対して、「選仙図」の方は伝存例が知られていないようである。ただ、明末清初の『天香楼偶得』（説庫）が「選仙図」について説明する次の記事などによって、およその内容は推察し得る。

今俗集二古仙人一作レ図、為二賭銭之戯一。用二骰子一。比色先為二散仙一、次陞二上洞一、以漸而至二蓬莱・大羅等列一。則衆仙慶賀。……此戯、宋時已有レ之。

「古仙人」を集め画いた紙上にて、骰子を振ることにより、仙界での役職がない「散仙」からスタートして「上洞」に昇り、蓬莱山や大羅天を目指していく、というやはり絵双六の類であるらしい。嘉慶二十年（一八一五）『談徴』（明清俗語辞書集成）事部は右記事をそのまま掲載するだけだが、『通俗編』（中華書局刊本）巻三十一では、先引『宮詞』とともに右記事の前半を掲げたうえで、「選仙図」について、

此与二選官図一無二他異一、惟易レ官為レ仙。大凡婦女輩無二服官之志一。因小変二其名目一焉。

と、「選官図」の「官」を「仙」にただ置き換えたようなものだと説いてもいる。先引『五雑組』も「選仙図」を「陞官図」に類するものと記していたし、『陔余叢考』（甌北全集）巻三十三も「陞官図」の項目の中で、「又、宋時有二選仙図一」として、右記事の一部を『宮詞』とともに掲げて、「亦彩選之類也」（先引『五雑組』に「……有二彩選格一。即今陞官図也」）などと述べている。

さて、『列僊寿娯禄』の場合、列せられた五十名の仙人の間に「散仙」「上洞」といった順位が明確に設定されているわけではなく、「選官図」「陞官図」に類するとは言い難い面もあるが、まさに「古仙人」を集め画いた一紙の上で骰子を振って上がりを目指すという点、右引『天香楼偶得』の記す「選仙図」の内容と相当に近いものがあろう。『列僊寿

娯禄』は、日本版「選仙図」ともいうべき性格を持った絵双六だと言えよう。

文政九年（一八二六）刊行の柳亭種彦『還魂紙料』（日本随筆大成）は、日本の浄土双六について、

此双六の起に種々の説あり。まづ漢土に選仏図といふ物あり。それを写し、物といへり。長胤が〔名物六帖〕に五雑組を引て、選仏図と仮字を附たり。

と述べている。少なくとも一説として、日本の浄土双六は、先引『五雑組』が「選仙図」とともに挙げていた「選仏図」に拠ったものである、と捉えられていた。その当否は措くとして、そうした見方がどの程度か拡まっていたのである。とすれば、もう一方の「選仙図」に倣ったものを作成しようという企画が持ち上がったとしても何ら不思議ではないだろう。『列僊寿娯禄』は、そのような企画を経て出現した日本版「選仙図」であるのかもしれない。

二　予祝する絵双六——田安斉匡手翫

『列僊寿娯禄』には欄外四隅に小さな所蔵印（陽刻朱長方印、縦〇・九糎×横一・一糎）が見られるが、そちらについては不明。一方、縦三〇・七糎×横二五・八糎の桐箱に折り畳んで収納されている、その箱の蓋の表の中央に大きく「列僊雙六」と墨書されると共に、裏に次の通りの墨書・朱印が見られる点、注意される。

田安一位様御手翫之
雙陸　天保七申十一月二日
神田橋御屋形御引移之節
御譲

鍋島
家印

（陽刻朱正方印、縦三・〇糎×横三・〇糎）

冒頭の「田安一位様」とは、徳川御三卿の一つ田安家の第三代当主である田安斉匡[3]（一七七九～一八四八）。斉匡は天保八年（一八三七）十月に従一位に叙されており、例えば、鍋島家文書に斉匡の三回忌・七回忌の記録である「田安一位様御逝去并御年回之一通」が含まれてもいる（鍋八七四―一九　『佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録　郷土資料編』）。右の裏書の通りであるとすれば、『列僊寿娯禄』は、江戸城田安門内の屋敷（田安屋形）にいた田安家の当主が手許に置いていた絵双六なのであって、多数伝存する版行されて庶民に親しまれていたようなものとは異なることになる。先述通り、日本には類例の見られない内容の、肉筆の絵双六でもあった。田安家当主に宛てて作成された、オリジナルの特注品でもあろうか。これも先述したように、『列僊寿娯禄』には不老不死あるいは不老長寿の仙人が計五十名集められていて、上がりも「福星」と「寿星」になっている。「福星」の方には鶴や蝙蝠らしきもの、「寿星」の方には亀が、それぞれ画き込まれてもいる。そのうえ、ふり出しには亀に戴かれた蓬莱山や鶴が画かれ、タイトルにおいても「寿」や「禄」の字が宛てられている。[4] いかにもめでたさに満ち溢れているのであって、『列僊寿娯禄』作成年の文政六年には四十代半ばに至っていた田安家当主の長寿と福楽を予祝する意味を持っていただろうか。

ところで、五十名の仙人を集め画いて作成された絵双六『列僊寿娯禄』は、列仙図あるいは群仙図を絵双六化したものとも捉えられるだろう。『列僊寿娯禄』に画かれた五十名は、後述する二名を除いてすべて中国の仙人であって、先述の日本版「選仙図」という側面とともに、同双六が異国趣味の産物でもあることを示唆しているが、その中国仙人四十八名のうち九割ほどは『列仙全伝』に立伝された仙人たちであり、さらにそのうちの七割ほどは、『列僊寿娯禄』に画かれた絵と『列仙全伝』に載る挿絵とがほぼ完全に一致するか相当に近似している。『列仙全伝』は、慶安三年

（一六五〇）と寛政三年（一七九一）に和刻本が刊行されていて、近世以降に普及したことが知られている。弟子に道教の講義をした江戸中期の谷口一雲は『列仙全伝』の抜書本を作成しているし、大江文坡の著作として数え上げられている『日本列仙全伝』（現佚）も『列仙全伝』を意識したものであるに違いなかろう。その影響は、仙人図や仙境図を多く画いた近代日本画の富岡鉄斎の作品にまで及んでもいる。『列僊寿娯禄』も『列仙全伝』に拠るところが大きいのであろう。ただ、すべて『列仙全伝』に拠っているというわけではない。そもそも同書に立伝されていない中国仙人を数名含んでいるし、『列仙全伝』の挿絵よりも、それを基盤とした元禄二年（一六八九）刊行の菱川師宣『異形仙人つくし』や安永九年（一七八〇）刊行の月僊上人『列僊図賛』に載る絵の方により近い場合も見られる。『列仙全伝』以外のものも種々参照しているものと見られる。[5] 以上について、編末の《『列僊寿娯禄』各マス記載事項等一覧》参照。

右の『列仙全伝』などとは別にまた注目したいのは、群仙図の中のある一群である。例えば、神戸市立博物館に所蔵される寛文九年（一六六九）の河村若芝筆『群仙星祭図』。鶴に乗って飛来する南極寿星の化身寿老人と、それを見上げて迎える十六人の仙人たちとを、画く。同様の図様は、祇園祭の八幡山の前懸『慶寿群仙図』にも見られる（保昌山見送にも）。元禄三年（一六九〇）に寄進されたもので、昭和六十二年に復元新調されている。その他、兵庫県加美町の金蔵寺が所蔵する渡辺梁益（一八〇〇～?）筆『群仙迎寿図襖絵』なども同様である。「群仙星祭」「群仙慶寿」「群仙迎寿」などと称されるこの画題は、長寿を祝う、中国以来の伝統的なものであること、知られる通りである。[6]

さて、『列僊寿娯禄』は、鶴に乗って飛来する姿ではないものの、最上段中央部の上がりに福星とともに寿星・寿老人を画いていて、その下方あるいは左右に五十名の仙人たちを配しているのであって、それは右の画題の図様と通じ合うところがあるだろう。寿老人とそれを迎える仙人たちを画いたものとも見做し得るのではなかろうか。『列僊寿娯禄』は、一人一人の仙人の選定と図様については『列仙全伝』などに拠りつつ、全体としては、群仙図の中でも特には右の

「群仙慶寿」等の画題を踏まえて、それを絵双六化したものという側面を持っているように思われる。そうした側面もまた、田安家当主の長寿と福楽を予祝する絵双六として誠に相応しいものであるに違いない。

なお、先には本双六について作者不明と述べたが、右の田安斉匡は画技に優れ少なからず絵画作品が知られてもいるので、斉匡自身の画いた絵双六である可能性も考えておくべきなのかもしれない。[7] また、先の箱蓋裏書は、天保七年（一八三六）十一月二日、斉匡が神田橋の御屋形に移った際に、この『列僊寿娯禄』が鍋島家に譲渡されたのだと伝えている。先述通り斉匡の三回忌・七回忌の記録が鍋島家文庫に所蔵されてもおり、田安家と鍋島家には何らかの結び付きがあったようである。田安家初代当主宗武の女・淑姫が鍋島重茂（一七三三～七〇）の正室となっていたし、斉匡の十九女・筆姫も、嘉永二年（一八四九）に鍋島直正（一八一五～七一）の側室となっている。実際に斉匡から鍋島家に譲渡されたのだとしたら、その背景に右のような両家の関係があったのに違いなく、『列僊寿娯禄』はまた、両家の結び付きを物語り今に伝える物品でもあることになる。

三　計算する絵双六――ゲーム性の向上

絵双六は、出た目の数だけ順にマスを進む「廻り双六」と、出た目ごとの次の移動先が各マスに記されているのに従って進む「飛び双六」と、基本的な形式によって二種類に分けられるが、『列僊寿娯禄』は後者の飛び双六の方である。飛び双六の作成に当たっては、各マスからの移動先をいかに設定するのか、ふり出しから上がりまでにいかなるルートを設定するのか、というようなことが一つの重要な鍵になるのであろう。『列僊寿娯禄』のふり出しに示された次の移動先計六マスのうち、上から五段目で右から8列目のマス五8梅福および五4列子・五1葛玄・五9葵女仙の四マスはいずれも、それらマスへの移動の指示が他のマスには全く見られず、ふり出しからそこへ移動しない限り、そこにコマ

が進むことは最後まであり得ない（編末《『列僊寿娯禄』各マス記載事項等一覧》参照、以下同）。つまり、それらマスの存在する意味が極めて限定的なのである。例えばそういう設定は、配慮に欠けた計算不足の結果であるのかと思われる。そうした面もいくらか指摘し得るが、概ねは周到に計算された設定がなされているようである。

上がりと同段に位置する第一段の四マスはひとまず措き、また、最下段の第六段に属する八マスも除き、第二～五段それぞれに属する十個または八個のマスそれぞれに記された次の移動先について、各マスの位置する段よりも上の段のマスが指示されている場合、逆により下段のマスが指示されている場合、あるいは同じ段の別のマスが指示されている場合、それら各々の数を検するに、大体において、上段のマスほどより下段のマスが移動先として指示されている割合が高く、下段のマスほどより上段のマスが移動先として指示されている割合が高い。下方のふり出しから上方の上がりを目指して進む本双六にとって、そのゲーム性を高めるうえで相応しい計算された設定であるに違いなかろう。

上がりの「福星」「寿星」と同じ第一段に属する四マス〈一1彭祖・一2西王母・一9東方朔・一10長果老〉それぞれに示された六つの移動先

〈一1彭祖〉　一2西王母　上がり福星　上がり寿星　一9東方朔　一10長果老　四3太真夫人
〈一2西王母〉　上がり福星　上がり寿星　三10弄玉　一10張果老　一1彭祖　一9東方朔
〈一9東方朔〉　上がり寿星　上がり福星　三10弄玉　一10張果老　一1彭祖　一2西王母
〈一10張果老〉　一9東方朔　上がり寿星　上がり福星　一2西王母　一1彭祖　四3太真夫人

は、極めて規則的である。四マスからの移動先としていずれも、上がりの福星と寿星を含み、それ以外は、同じ第一段に位置する他の三マスと、三10弄玉あるいは四3太真夫人である。第一段の四マスのいずれかに至ることができれば、どのマスであれ、そこから三分の一の確率で上がりに到達し得る。逆に、いずれのマスでも六分の一の確率で三10か

四3に落ちる、ということになる。第一段の四マスを貫く共通の設定が意図的になされたものであること、疑いない。

第一段のマスから下段へと落ちる場合、その移動先は三10弄玉か四3太真夫人に限られているのだが、それらのマスに示された移動先

〈三10弄玉〉　一9東方朔　一1彭祖　一2西王母　二3蝦蟇　四3太真夫人　上がり寿星

〈四3太真夫人〉　一2西王母　一9東方朔　一1彭祖　二10琴高　三10弄玉　上がり福星

を見るに、いずれも「六」の目が出た際の移動先として上がりのマスが指定されている。第一段の四マスそれぞれに移動先として二つの上がりのマス「福星」「寿星」が示されていることは先述通りだが、第二段以下のマスの中で次の移動先に上がりのマスを含むのは、右の三10と四3だけである。一旦落ちてもそこから直接にゴールできる道が殊更に開設されているのである。また、それぞれ六箇所示されている移動先のうち半数は、これも先述通り三分の一の確率で上がりへと進める第一段のマスになっている。さらに、残り二つ指示されている移動先のうちの一つは、三10の場合は四3、四3の場合は三10であって、そちらに移って上がりへの再挑戦をすることもできる。上がりの直前で落ちた場合には復活への分厚い救済措置が施されているのである。三10または四3において、上がりを目前にしながらそれらマスに落ちた遊戯者は、何とか救済ルートに乗ることを願い、あわよくば一気に上がりに到達しようと、また逆に、さらに落ちていく道にだけは足を踏み入れることがないようにと、ドキドキしながら骰子を振ることになるはずである。そうした遊戯者の心理を計算して、設定がなされているに違いない。

さらに、右の三10と四3はそもそも、特別なラッキーマスでもあるようだ。ふり出しに示された六つの移動先のうち先掲の四マス以外はこれら両マスになっていて、「一　太真夫人」（四3）「六　弄玉」（三10）と指示されている。したがって、ふり出しで「一」の目が出たら四3に進めて、先述通りそこで「六」の目が出たらもう上がり「福星」に到達

できることになり、同様に、ふり出しで「六」の目が出たら三10に進めて、先述通りそこでまた「六」の目が出たらもう上がり「寿星」に到達できることになる。ふり出しから二度骰子を振っただけで上がりに達してしまうという、言わば超高速ルートである。「一」か「六」の目が出てそのルートに乗るか、それ以外の目が出て同ルートから逸れてしまうか、最初のふり出しの段階で大きな分岐点に立たされて、遊戯者は、期待と不安の入り混じった緊張感を味わうだろう。そういった点も見越して、右のようなルートを敢えて設定したのに違いあるまい。ゲーム性を向上させるための計算が、早くもふり出し部分からめぐらされているのである。

四　久米仙人という仕掛け——墜落説話の再現

さて、先にも触れたように、『列僊寿娯禄』が動員する五十名の仙人のうち四十八名までは中国の仙人だが、残り二名は異なっていて、そのうちの一名が久米仙人である。右に見てきた通り周到に計算する『列僊寿娯禄』であるのだから、その点にも何らかの意味があるのに違いない。

久米仙人のマスは、上がりに程近い第二段第1列に位置している。そこには出た目ごとの次の移動先が、左の通り示されている（後掲図3参照）。

一　浣衣女〈六10〉　二　費長房〈二2〉　三　赤松子〈三2〉
四　初平〈二8〉　五　琴高〈二10〉　六　呂洞賓〈二9〉

右のうち四つは、久米仙人のマスと同じく第二段に位置する別のマス、二つは、第六段と第三段というより下段に位置するマスで、上段つまりは第一段のマスはない。同じ第二段の他の九個のマスにはいずれも、移動先として第一段のマスが一～三個示されている。第二段に属する計十個のマスの中で、二1久米ノ仙だけが、第一段のマスへのルートを

閉ざされているのである。さらに言えば、他の計四十九個のマスにはすべて、移動先としてより上段のマスあるいは上がりの「福星」「寿星」が一つは指定されているのに、唯一久米仙人のマスだけが、移動先としてより上段のマスを含んでいないのでもある（以上、編末《『列僊寿娯禄』各マス記載事項等一覧》参照）。先の三10弄玉・四3太真夫人とは逆に、二1久米ノ仙は、上がりまであとわずかの地点に殊更設定された、落とし穴的なアンラッキーマスなのではないかと見られる。

特に注意されるのは、二1久米ノ仙に示された先掲の移動先の中に六10浣衣女が含まれることである。それは、最下段の左端に位置するマスであって、第二段右端に存する二1で「一」の目が出れば、本双六一紙の画面をほぼ対角線上に最長距離落下することになる。第一段・第二段の中に、最下段の第六段のマスが移動先として示されたマスは他にない（編末《『列僊寿娯禄』各マス記載事項等一覧》参照）。さらに、右の六10には、次の移動先が「一　久米仙」と「三　曹仙媼」しか示されていない[8]（後掲図4参照）。つまり、六10に落ちたら「一」か「三」が出ない限り、そこから抜け出すことができないのである。先述通り三10・四3に落ちても用意された分厚い救済措置に助けられるのとは、まるで正反対である。そして、この六10が移動先として指定されたマスは二1だけであって、二1で「一」の目が出た場合にのみ六10に陥ることになる。二1が六10への唯一の入口なのであり、万一その二1から六10へと最長距離を落ちてしまったら、今度はそこからなかなか脱出できない。久米仙人のマス二1は、落とし穴でありつつ、かつ、蟻地獄とも言うべきマスにもなっているのである。『還魂紙料』が浄土双六について、「永沈（ようちん）こ、に堕（おつ）れば永（なが）く沈（しづん）で出（いで）ず、故（ゆゑ）に如此（しかよぐり）号。……やうちんにおつるとは、今もいふ諺（ことわざ）にて、鄙俗（ひぞく）は永沈（やうちん）を地獄（ぢごく）の名（な）と思ふも、此双六（このすごろく）の流行（おこなはれ）し余波（なごり）なり」と記す、その「永沈」に匹敵するものと言ってよかろう。

ところで、右の六10には「浣衣女」が画かれているが、そんな仙人は中国にも日本にも見当たらない。「衣を浣ふ女」

というその名の通り、衣を洗濯しているらしい姿が画かれている（後掲図4）。この「浣衣女」が何者であるかと考える時、有名な久米仙人説話が想起されるべきだろう。例えば『徒然草』（新日本古典文学大系）第八段に

久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て、通を失ひけんは、誠に手足・はだへなどのきよらに、肥えあぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし。

とある。久米仙人墜落説話が引かれているが、そこに登場するのが、「物洗ふ女」だった。

その点は、次の通り、同説話を載せる他の多くの文献でも同様である（各実線部）。

久米モ既ニ仙ニ成テ、空ニ昇テ飛テ渡ル間、吉野河ノ辺ニ、若キ女衣ヲ洗テ立テリ。衣ヲ洗フトテ、女ノ肿脛マデ衣ヲ掻上タルニ、肿ノ白カリケルヲ見テ、久米心穢レテ、其女ノ前ニ落ヌ。其後、其女ヲ妻トシテ有リ。……其久米ノ仙、只人ニ成ニケルニ、馬ヲ売ケル渡シ文ニ、「前ノ仙、久米」トゾ書テ渡シケル。

（『今昔物語集』巻十一24、新日本古典文学大系）

昔有レ女。於二久米川一洗レ衣。古仙見二其脛白一、自二従天一落。

（『多武峯略記』新校群書類従）

久米の仙人は、通を得て空を飛びありきけれど、げす女の物洗ひける脛の白かりけるに欲を発して、仙を退して只人となりにけり。

（『発心集』巻四5、新潮日本古典集成）

一仙者歴人村一……行之間、直下観久米河険。有女人安雲（坐カ）洗物、其肥潔（コマヤカニ）ラ。仙人見之一、俄発邪欲一、落於女人之傍。神足已失。……女人垂哀憐……数月之間隠養、遂以交通。其後改形還俗、永成夫婦。

（『七大寺巡礼私記』校刊美術史料）

常自二龍門嶽一飛通二葛木峯一。於二其途中久米河一有二洗レ布之下女一。仙見二其股一色愛心忽発、通力立滅、落二于大地一畢。終則以二其嫗一為レ妻、居二寺外院一。

（『和州久米寺流記』大日本仏教全書）

吉野河辺仁若女之衣洗立。其女之肩脛マテ衣ヲ掻上。肩之白於見、久米仙人心穢而、其女前仁落了。仙人只人仁成。

（菅家本『諸寺縁起集』校刊美術史料）

最近の西野由紀氏「物洗ふ女―『大和名所図会』における久米仙人伝承の図像―」（『山邊道』56、平27）は、これら事例を始めとして、近世のものまで多くの文献を収集し分析している。その西野論文が取り上げていない近世の文献にも――

昔、久米の仙人は、物洗ふ女の木綿湯具のびらつきて、脛の白く見へしにさへ、通を失ひしためしもあり。

（『風流志道軒伝』日本古典文学大系）

嫁の洗濯仙人が落ちやすぜ

（『誹風柳多留』九十一篇19　誹風柳多留全集）

下女の洗濯仙人も逃げ上がり

（『誹風柳多留』一二四篇90）

久米仙人の画に

たをやめのあらふ衣の塵（ちり）ひぢやつもりてなれる恋の山人

（『をみなへし』大田南畝全集）

「浣衣女」つまりは衣を洗う女とは、右に挙げた通り、有名な久米仙人墜落説話においてほぼ例外なく登場する、洗濯する女性であるに違いない。本来仙人などではない彼女を仙人に見立てて、左下隅のマスに置いたのである。二1久米ノ仙で「一」の目が出たら、第二段目右端から最下段左端へと落下することになるというのは、洗濯する女性の脛の白いのを見て、久米仙人が通を失い、その女性のもとに落ちたという、右に所載文献をいくつか挙げてきた有名な説話を背景に、それと重ね合わせて設定された仕掛けであった。さらに子細に見るならば、二1久米ノ仙に画かれた久米仙人は左下の浣衣女の方を見ているようである（後掲図1・3参照）。つまりは、久米仙人の視線も、洗濯する女性の脛を見て落ちたという久米仙人墜落説話と照応している。一紙の双六画面上で久米仙人墜落説話を再現するかのように、

久米ノ仙のマスで「一」の目を出した遊戯者のコマは、浣衣女のマスまで落ちていくのである。そして、久米仙人が洗濯の女性と結婚し還俗したとも伝えられる（先引破線部）のまでなぞるが如く、そのマスからなかなか脱け出せないことになる。

「浣衣女」という名も決して偶然のものではない。久米仙人墜落説話は、先に挙げた以外、『元亨釈書』（新訂増補国史大系）巻十八にも、

久米仙者、和州上郡人。……一旦騰レ空、飛過二故里一。会婦人以レ足踏二浣衣一。其脛甚白。忽生二染心一、即時墜落。

と見える。同じく洗濯する女性が登場するが、その女性は「踏二浣衣一」っていたと記す。「浣衣女」とまさに同じ表現が使われていることに注意されよう。先の西野論文も、近世の『徒然草』注釈書について、久米仙人墜落説話を載せる「第八段の典拠は『元亨釈書』をあげるのが通例であった」と指摘する通り、『元亨釈書』所載の同話が広く参照されたようである。「浣衣女」は、近世に普及したその『元亨釈書』所載先引記事を原拠としての命名であるに違いない。文政元年（一八一八）の馬琴『玄同放言』（日本随筆大成）巻三人事部三も、右『元亨釈書』所載記事を引用したあと、恐らくはその記事を踏まえてのことであろう、「虚空（こくう）を飛行し、浣婦の素脛（しらはぎ）を見て、堕落（だらく）せし」と、洗濯の女を、「浣衣女」に近く「浣婦」とする。

ところで、六10浣衣女に画かれた絵（後掲図4）には、少々奇妙に感じられるところがある。『元亨釈書』を原拠として「浣衣女」と命名しておきながら、『元亨釈書』が「踏浣衣」と、女性が踏み洗いしていたと伝えるのと合致しない絵になっている点、なぜそうなっているのか、そこに何らかの意図があるのか否か、わからない。しかし、今問題にしたいのはその点ではなくて、衣を手洗いしている浣衣女の視線である。衣を手洗いする女性を画く場合、通常ならば、手許のあたりに視線を落としている姿に画くのではないだろうか。ところが、この『列僊寿娯禄』の浣衣女は、全く手

許とは異なる方向、振り返るようにして、手許とは反対の、この女性から見て左手斜め上方を見ているようである。衣を手洗いする女性の絵として、不自然に見える。そして、その視線の先を辿るなら、二1久米ノ仙に行き着くのではないか。浣衣女を見ている久米仙人の気配を感じて、そちらの方を見ている、ということだろうか。それとも、久米仙人が墜落してくるのを見ているということだろうか。あるいは、先述通り久米仙人が女性のもとに落下したあと二人が夫婦になったとも伝えられている（先引破線部）が、これも先述通り久米仙人も浣衣女の方に視線を向けていて、双六上で二人が目と目を合わせているようであるのは、そうした行く末を暗示してもいようか。いずれにせよ、久米仙人だけでなく浣衣女の視線も、久米仙人墜落説話に照応したものとなっているに違いない。

五　取り巻く「仙仲間」――群仙のもう一つの意味

久米仙人墜落説話を題材とした江戸の川柳狂句は数多いが、その中に「仙仲間」の登場する句が、次の通り少なからず見られる。

a 久米が見えぬと立騒ぐ仙仲間　（『狂句むめ柳』二十篇16　古典文庫『日本史伝川柳狂句』）
b 粂かすこたん聞たかと仙仲間　（『誹風柳多留』四十三篇3）
c 女湯を見たらとそしる仙仲間　（『誹風柳多留』一二六篇52）
d 腰ぬけと久米をあざける仙仲間　（『誹風柳多留』一〇一篇43）
e 腰の痛みはどうだなと仙仲間　（『江戸川月並会句合』古典文庫『日本史伝川柳狂句』）
f もみ医者に見せやれなどゝ仙仲間　（『誹風柳多留』一〇三篇2）
g 其後は上見て暮らす仙仲間　（『狂句むめ柳』十二篇38）

久米仙人が通を失い墜落したあと、その姿が見えないと騒いだり（a）、その失態について噂し合ったり（b）、嘲笑したり（c d）、墜落した際に負った打撲症を心配して久米仙人を見舞ったり（e f）、反面教師的に受けとめ下を見ないようにしたり（g）と、「仙仲間」の様々な反応や言動を捉えている。

墜落した久米仙人自身を描く句は無論多く存するし、また墜落の原因となった洗濯女に特に焦点を絞った句も、

人が降たと洗たくを止て逃ゲ　（『誹風柳多留』九十七篇3）

仙人サマアト濡手てかいほうし　（『誹風柳多留』三十八篇31）

仙人の顔へたらいの水をふき　（『誹風柳多留』一〇六篇42）

のように作られている。先に列挙したのは、これら説話の登場人物とは違って、説話には全く登場しない「仙仲間」へと、想像力を及ぼしたものということになる。なお、「仙仲間」は、久米仙人以外にも例えば、魂を遊離させている間にもとの身体を焼かれてしまったという鉄枴を取り上げた句にも

鉄枴は仙仲間での離魂病　（『誹風柳多留』一二七篇101）

と見られる。ある仙人から「仙仲間」へと対象を拡大したり転じたりするというのは、一つの常套的な発想であったのかもしれない。「仙仲間七百歳も童子なり」（『誹風柳多留』一二四篇79）という句もある。

明和十年の刊記を有する『俄仙人戯言日記』（上方藝文叢刊）には、冒頭部を中心にかなりの頻度で「仙人仲間」が出てくる。そして、仙人になるという大願の成就を祈念しにきた清貧斎無銭に、久米仙人が告げた言葉の中には、こうある。

汝が知る通りおれハ日本生れにて、自慢するでハなけれと、美男の指折にもいり、業平にもまけぬ色男。其以前、仙界へ行たれバ、仙女の内に惚人おゝく、雨のふるやうな付文。日本の女とちがひ、どこやらがぢゞむさく、ほの

〳〵香のするわろ達に、つけ廻されるつらさ。ちつ共早うかへりたく、仙人仲間へいとまごひもせず、夜ふけにして雲にのり日本の地に帰り、ちらほら女を見るに、仙女とハ大きなちがひ、水際立てうつくしく、おたふくも小町のやうに思ハれ、うか〳〵くる雲の上、河端に物洗ふ十七八なよい女の脛の白いに見とれ、乗た雲を踏はづし、どふど落た拍子にこし骨を大きにうち、杖にすがって漸と戻る事は戻たれど、今に土用八専にハ其おどもりにいためられ、折々ハきついこまり。此事あつちへ聞へて仙人仲間の物笑ひ。無念に思へとせひもなし。其おれがせわするゆへ大かた悪所友達であらふと、石部金吉な費長房、琴高、其外壺公の上利剣、天竺からあらゝ、一角、金花山の初平など立会、仙人にせふのせまいのと評議。大かたならぬに極りしを、……

右の後半に語られる墜落説話の前後に、「仙人仲間」が見える。「仙人仲間」に暇乞いすることもなく「仙界」を出て日本に帰り墜落すると、そのことが「あつち」つまり「仙界」に聞こえて、「仙人仲間」の「物笑ひ」になった、と語る。これら「仙人仲間」は、先の川柳の「仙仲間」と同様の存在であるに違いなく、右のうち後者の物笑いする「仙人仲間」は特に、先掲の川柳bの「粂かすこたん聞たか」と噂する「仙仲間」や、dの「腰ぬけと久米をあざける」「仙仲間」と重なる。

また、安永三年（一七七四）刊行の草双紙『風流仙人花智』（校註黄表紙代表作選）にも、「仙人仲間」が登場する。「物洗ふ女の脛の白きを見て通を失ひ、彼の女に契りを込め、一人の娘を儲」けていた久米仙人が、仙人になることを願う浮世仙介とその娘の婚姻が決まった際に、「智仙介を諸仙人仲間へ披露めして近付きにせんと、仙鶴に回文を記め結ひつけつかはす」と、「山川深山の仙人仲間、我も〳〵と粂の仙人方へ参会して喜びを述べ」た、とする。具体的に名が挙げられた仙人は、蝦蟇仙人・張果良・鉄枴仙人・琴高仙人・黄鶴仙人などである。墜落説話と直接には関わっていないが、その延長線上に「仙人仲間」が登場しているのである。

国立国会図書館所蔵『絵本集艸』は多数の作品を合綴したものだが、そのうち第十六冊に久米仙人の登場する作品（作品名未詳　仮題「久米仙人後日譚」）を含んでいる。棚橋正博氏作成の梗概[9]は、次の通り。

大阪横堀を飛行していた久米仙人は洗濯をしていた小萩の脛の白さに目がくらみ地上の人となり、小萩を女房に娶って松葉煙草売りとなる。西王母が見舞いに来るや、一子をもうけながらも、かつての女房にうつつを抜かすかと小萩は大焼餅をやく。また、鉄枴仙人も現われ、一子粂太郎の前で仙術を披露して大いに嬉ばす。小萩は同じく訪れた費長坊から折鶴に乗る飛行の術を授かる。粂太郎も水行の術を習う。

久米仙人の他に、西王母・鉄枴仙人・費長房の三名の神仙あるいは仙人が登場している。さらに、右梗概には現れていないが、「かませんにん」（蝦蟇仙人）も西王母の隣に画かれていて「きのとくかな」と発言しているし、粂太郎が水行の術を習うという最後の場面に「しやうりけんのほうにならひ」とあるので、「上利剣」も登場している。墜落後の久米仙人を、西王母が見舞ったり（「西王母見まいにきたりうたかはれめいわくの処」）、あるいは蝦蟇仙人や鉄枴、費長房、上利剣が訪れたりするのは、先の川柳のうちeやfにおいて「仙仲間」が久米仙人に「腰の痛みはどうだな」「もみ医者に見せやれ」と声をかけるのと近い情景であり、「仙仲間」「仙人仲間」であると記されているわけではないけれど、西王母らは右の絵本の中で、「仙仲間」に相当するような存在になっていると言えよう。

久米仙人墜落説話にどの程度かは関わって、久米仙人と同じく仙人である者たち「仙仲間」「仙人仲間」の存在に想い及ぼす事例が、右の通り『列僊寿娯禄』成立の前後に種々見られることを確認し得た今、そのことを念頭に置きつつ改めて『列僊寿娯禄』を眺めるならば、久米仙人と浣衣女以外に集め画かれた四十八名の仙人たちが、あたかも久米仙人を取り巻く「仙仲間」「仙人仲間」であるかのように見えてこないだろうか。先引『俄仙人戯言日記』に登場する仙人のうち天竺の「あらゝ、一角」を除く費長房・琴高・上利剣・（黄）初平、『風流仙人花聟』に登場するうち黄鶴仙人

を除く蝦蟇仙人・張果良・鉄枴仙人・琴高仙人、右の『久米仙人後日譚』に登場する西王母・蝦蟇仙人・鉄枴仙人・費長房・上利剣も、その四十八名のうちに入っていて、それぞれ『列僊寿娯禄』の二2・二10・三8・二8・二3・一・10・二4・一2・二2・三8のマスに画かれている。いずれも二1久米ノ仙にごく近いかかなり近い位置であるのも全くの偶然によるものなのかどうか。もしかしたら久米仙人の「仙仲間」「仙人仲間」としてより想起されやすい仙人が近くに配されているのでは、といった憶測も生起しなくはない。『列僊寿娯禄』には「群仙慶寿」などと称される画題に倣って寿老人を迎える群仙を画いた面があるのではないかと先に述べたが、また一方で、浣衣女を除くと五十名のうちの唯一の日本の仙人であり、先述通り特別な仕掛けとして盛り込まれた久米仙人のマスを中心としつつ、『列僊寿娯禄』の一紙全体を見渡すならば、四十八名の「仙仲間」「仙人仲間」が久米仙人を取り巻いているように見えて、「粂かすこたん聞たか」「腰の痛みはどうだな」といったつぶやきが、そこここから聞こえてきそうに思われるのである。

右に見てきた通り、日本版「選仙図」とも言うべき『列僊寿娯禄』は、田安家当主の長寿と福楽を予祝するという重い目的を持つ一方で、ゲーム性を高める計算を種々行っていて、その中で久米仙人の墜落説話を巧みに利用していた。同説話を紙上にて再現しているとも先に述べたが、二1久米ノ仙で「一」が出た場合、久米仙人が墜落したのと同じように、取り巻く「仙仲間」に嘲笑されたりもしながら、この絵双六の遊戯者、享受者のコマが一気に最下段へと墜落することになるのであって、それはまた、享受者が同説話を紙上で擬似体験するということに他なるまい。『列僊寿娯禄』は、享受者に向けてそういう仕掛けを施しているのである。例えば、近松『丹波与作待夜の小室節』（新編日本古典文学全集）の中で、東海道の道中双六を姫様に勧めて「これ〳〵御覧ぜ、打たしやんせ、これこそ五十三次を、居ながら歩むひざ、膝栗毛馬、はいしだう中双六、……」と言うように、あるいは近年の人生ゲームなどでもそうであるように、

絵双六の類は、何らかの擬似体験をごく簡便に享受者にもたらし得るゲームである。『列僊寿娯禄』は、そうした絵双六の特長を活かして、久米仙人墜落説話の擬似体験を享受者に向けて仕掛けたゲームなのだとも言えるだろう。

付.〈粗描〉久米仙人墜落説話利用略史

知られる通り、久米仙人墜落説話は広く流布し、様々に利用されてもきた。その同説話利用史の中でも、右の『列僊寿娯禄』の場合は、かなり特徴的な利用例なのではないだろうか。久米仙人墜落説話の利用史の中における右事例の位置付けなどについて確認するためにも、以下に、一つの試みとして、その利用のあとを粗々辿ってみたいと思う。なお、判別し難い面もあるが、同説話が単に享受されているというのではない、利用されていると言うべき事例を中心に取り上げる。また、網羅し得ているわけでは到底なくて、飽くまで「略史」の「粗描」である。

1　擬似体験ゲームへの道―近世以前―

『発心集』巻四5は、「彼の浄蔵貴所は、日本第三の行人なれど、近江守ながよが女に契りを結べり」という浄蔵説話とともに先引通り久米仙人墜落説話を掲げて、「いかなる智者かは、媚びたる形を見て目を悦ばしめざる」ということの例話として利用している（『私聚百因縁集』巻九21に書承）が、同様の例話としての久米仙人墜落説話利用例は、有名な先引『徒然草』第八段など、数多く存在するに違いあるまい。時代下って、例えば『風流志道軒伝』において、浅之進が透明人間となって「三千人の官女」のいる清の乾隆帝の後宮に忍び込んだ場面に、先引通り久米仙人墜落説話を簡略に記述して、「かく数多ある美人の中に至りなば、釈迦も黄金の涎をながし、達磨の目玉も絹糸のごとくなるべし。浅之進も心乱れて城外に出る事をしらず」と続けるのも、また、『風流仙婦伝』（洒落本大成）が「さりながら煩悩（ほんのう）の心

さしあれはたちまち通力をうしなひもとの人間となるへし。久米の仙人さへ女のはきの白を見て、煩悩の心おこり通をうしなひ下界へ落しためしもあり。ゆめ〳〵つゝしみおこたるな」と登場人物に語らせているのも、同様の利用例である。あるいは、『好色一代男』（新編日本古典文学全集）巻七の「口添へて酒軽籠」が「『腰より下の一重もけふの汗に』とて、そこ〳〵にとき捨てて、行水の御裸身みるに、久米の仙もこんな事なるべし」と叙述するのも、具体的内容までは記述していないが、類似の事態を物語る周知の事例として久米仙人墜落説話を持ち出していて、近い利用例だと言えようか。幕末の『旅の恥かきすての日記』（近世紀行文集成）巻上が「此辺り農事甚忙し。婦人十六七なるものも、あか裸になりて二布ばかりして仕事をなす。その膚のくろさは、なか〳〵久米の仙人も通をうしなふ気遣ひもなひやう也」と描写するのは、反転させた形で例話として利用した表現ということになろうか。

『今昔物語集』巻十一24「久米仙人始造久米寺語」をはじめ『多武峯略記』や『七大寺巡礼私記』では、墜落後の久米仙人が久米寺を開創したと伝えるが、『和州久米寺流記』では、冒頭に「当寺者、来目王子之建立、推古天皇之御願也」と記すように、久米仙人でなく聖徳太子の弟の来目皇子の開創と捉えている。しかし、同書においても、久米仙人を完全に排除しているわけではない。「久米仙人経行事」と題する項目を立てて、その中で、先にも引用したところだが、

常自二龍門嶽一飛通二葛木峯一、於二其途中久米河一有二洗レ布之下女一。仙見二其股一色愛心忽発、通力立滅、落二于大地一畢。終則以二其嫗一為レ妻、居二寺外院一。

と、通常と同様の墜落説話を掲げ、二人が結ばれ久米寺の外院に住したとする。ところが、右に続いては、

但、昼雖レ為二夫婦之儀一、夜共修二坐禅之行一云々。

と述べ、さらに最後は、

夫婦共指二西方一飛去畢。其仙室之跡在レ今云云。〈世伝而云、仙人者十一面／観音、嫗者大勢至菩薩也云々。〉

と結ぶ。「色愛心」を起こし女と結婚した久米仙人であったが、男女の交わりはなく夜は共に坐禅修行に励んでおり、ついには西方に飛び去ったとする。さらには、久米仙人が実は十一面観音で、女は大勢至菩薩であったとする「世伝」を付記してもいる。墜落説話に始まる一連の話のうち後日譚の方に改変を加えることによって、色欲に溺れた存在では決してなかったのだとして、久米仙人の浄化を図ったものと見られよう。そうして、久米仙人が「寺外院」に住んでいたという、その「仙室之跡」が今もあると伝え、仙人と当寺との繋がりを確保して、墜落説話を含む久米仙人説話を当寺の宣揚に利用しようしている。久米寺側のそんな思惑が垣間見えるように思われる。

謡曲の『久米仙人』や『久米路』（ともに古典文庫）においては、久米仙人墜落説話が素材として利用されている。ただ、取り入れられるに際して内容的に改変・脚色されていて、『久米仙人』では、洗濯の女が実は、得仙以前から久米仙人の信仰する薬王菩薩が煩悩を断たせようと化したものであったとし、その後久米仙人が同菩薩を安置して「久米寺」と号したのだと伝え（現に久米寺の本尊は薬師如来）、『久米路』では、洗濯の女を見て仙術を失い悪趣に堕ちていた久米仙人が塚の辺りに現れ、熊野の山伏による弔いを受けて仏果を得るという筋書を展開する。演劇作品における久米仙人墜落説話の利用は、先の西野論文にも述べられるところだが、浄瑠璃においても、山本土佐掾『天王寺彼岸中日』とその改作である宇治薩摩『大和国久米仙人』や、歌舞伎としても上演された為永太郎兵衛『久米仙人吉野桜』に見られる。これら三作品では、全体の「筋書きは久米仙人伝承とまったく異なるものの、墜落の挿話が採用されている」のであって、『久米仙人吉野桜』の場合は、「数人の女性が岩明神の向かいの浅瀬で布を晒しているところに久米仙人が墜落するのだが、その理由は、女性の脛をみたためではなく、川辺にあった岩明神の霊力のためとされている」（先掲西野論文）。やはり大きく改変が加えられているのである。さらに歌舞伎『久米仙人袖振山』なども知られる。

右のうち謡曲『久米路』の場合、久米仙人の墜落自体よりも、それがために悪趣に堕ちていた久米仙人が熊野山伏に

より仏果を得るという、従来にはないその後の展開の方に重点が置かれているが、久米仙人墜落説話を概ね冒頭部に何らかの形で据え、それを端緒としてそこから新たな趣向を豊かに展開するという形の利用は、他にも種々認められる。先に触れたものでは、その脛を見て落ちた洗濯女との間にできた娘が主人公の男と婚姻することになる『風流仙人花婿』や、先述通り「久米仙人後日譚」という仮題が付されている『絵本集艸』所収絵本がある。他には、例えば『烟花漫筆』（洒落本大成）。その冒頭の「叙説」において、難波の道頓堀の賑わいを述べて「女の物あらふはきのしろきを見て久米ノ仙人のつうをうしなひし地、即こゝ也と、たしかなる書に見えたり」と記したあとに、久米仙人が「仙人の新ぞう」として店を出し、さらには「秋田屋久米右衛門」と改名して、南廓の繁盛の基礎を築いた経緯を物語る。また、喜三二の黄表紙『鯰山柴刈洗濯鬼崛大通話』[10]（『国立国会図書館所蔵黄表紙集』10）では、久米仙人が「はぎのしろきをみてつうをうしなひ」、その通が大江山の鬼が城に落ちて「どうじをはじめおにどもつうとなる」、という話を冒頭部に据えたうえで、桃太郎と酒呑童子の物語に久米仙人や大通仙人の絡んだ筋書を展開する。

「近世に入ると、……川柳や狂歌等にも、久米仙人を題材として戯画化した作品が夥しく作られ、久米仙説話は広く民衆の生活の中に浸透していった」（『日本伝奇伝説大事典』「久米仙人」条、小泉弘氏執筆）。川柳の素材として利用された例は先にも挙げたが、『日本史伝川柳狂句』（古典文庫）の「久米仙人」条には八十句以上が収集されている。[11] 久米仙人だけでなく、洗濯の女や前章に取り上げた「仙仲間」に焦点を絞ったもののほか、

御仏へ粂寺白き萩をいみ　（『新編柳多留』三集ツイ31　未刊雑俳資料）

稲荷山通を失ふ女仙人　（『誹風柳多留』一二五篇21）

といった句も見られる。久米仙人墜落説話を基盤としてそこから、一方は久米寺への供花へと目を転じ、他方は「女仙人」の場合へと転換する。久米仙人は「脛の白きを見て」（先引『徒然草』）墜落したのであって、前者は、それを踏ま

えて「白き萩をいみ」とする。後者は、稲荷山が男性器を想起させる松茸の産地であることに基づく。

萩の盛に客をとゝめて
はきを見て通はともあれ落ついて露の情をくめの仙人　（『狂歌若葉集』上、『天明五大狂歌集総句索引』）

萩
吹まくるすその、風に仙人もおつるはかりの白はきの花　（『徳和歌後万載集』巻三、『同右』）

これら狂歌では、萩から脛そして久米仙人墜落説話を想起して、同説話を踏まえる。なお、前章に触れた『絵本集艸』所収佚題絵本において洗濯の女の名を「小萩」としていたのも、「脛」と「萩」の連想が背景にあってのことだろう。

もともと滑稽味を含んで笑話的性格を備えている久米仙人墜落説話は、前章に挙げた通り滑稽味溢れる『俄仙人戯言日記』や川柳・狂歌に盛り込まれたが、また近世の笑話にも利用されていた。元禄十六年（一七〇三）刊『軽口御前男』（日本古典文学大系）に載る笑話「久米の仙」は、

色めきたる女、賀茂河へゆきて洗濯しける。折ふし風はげしく裾ひるがへり、脛のしろきをわれと見て、かの女房心におもふやう、「むかし久米の仙人、此やうな脛を見て通をうしなひ下界へくだりたまふときく。今の世にも仙人ありて落給ふまい物でない」と思ふ一念天に通じけん、雲間に仙人ま見へ給ふが、まぢかくさがると思へば、「脛にたをされた、べかかう」と云て上りける。

というもの。久米仙人墜落説話を趣向の根幹として取り込み（傍線部）、昔の久米仙人と同じく一旦は上空から自惚れ女の間近まで下ってきた仙人が、そこからは説話と異なり、「脛にだまされた。あかんべ」と言って上っていったとする点に、滑稽味が生じる、笑話である。挿絵には、賀茂川で洗濯する女性に向かって雲に乗った仙人が「あかんべ」をするところが画かれているが、同様の絵は『絵本乗合船』にも見られる。[12] この趣向は、先掲川柳「下女の洗濯仙人も逃

げ上がり」へと繋がってもいよう。さらに、寛延四年（一七五一）刊の岡白駒編『訳準開口新語』（噺本大系）に

一婦人行二橋上一。風飄飄（トシテ）颺レ裳（アグヲ）。適風鳶絶レ係（シテヲ）而隕（ツ）。婢視怪（テ）レ之。婦人曰。是久米仙人尸解（ノヌケカラスル）者耳。

とあるのも、同様に自惚れた女の話。『噺本大系』第十七巻の解題が指摘する通り、安永四年刊『和漢咄会』の冒頭部にそのまま取り込まれてもいるし、磯部祐子氏「漢文笑話『訳準開口新語』について」（『富山大学人文学部紀要』53、平22）によるに、同類話が以降の種々笑話集に見られもする。また、安永二年（一七七三）刊『口拍子』（日本小咄集成）に載る「仙人のとりちがへ」も、「久米仙人」の名は出ないものの、類似した形で久米仙人墜落説話を笑話に利用する。

その内容からいって当然のことでもあろうが、久米仙人墜落説話はまた、艶本類にも利用される。例えば寛政十二年（一八〇〇）刊の歌麿画『艶本多歌羅久良』[13]の中巻冒頭部の見開き一図には、物干し台から盥の中へ逆さまに落ちる男と、仰天して尻餅をつき乳房や陰部まで見せている洗濯女が画かれている。よくある久米仙人墜落の絵と同様の構図である。そして、書き込まれた男の科白に、

もゝのしろいどころでわない、ぼゞのあかいところまでみへちやァ、つうをうしなふもむりてはあるめへ。ものほしからおつこちるわたしかこゝろをすこしはくめの、せんずりばかりでつきひをおくる男でござる。

とある。久米仙人墜落説話では先述通り、洗濯する女性の特には白い脛が久米仙人の通力を失わせたとするのが通常であったが、そのことを踏まえつつ（破線部）、あるいは「もゝ」と「ぼゞ」とを対比させながら、川柳「黒ィ所ョまで見やうなら久米即死」（『誹風柳多留』八十七篇27）が脛の白を陰毛の黒へと転じる以上にエスカレートさせて、右ではそれを女陰の赤へと転じている（波線部）。そのうえで、「つうをうしなふ」という表現を用いるとともに「くめのせん」（久米の仙）を隠している（実線部　先掲狂歌にも「露の情をくめの仙人」）。久米仙人墜落説話になぞらえ、見立てたものであること、明白である。

右の笑話や艶本の事例では、久米仙人そのものが墜落しているわけではない。黄表紙『石通儘而啌多雁取帳』（新編日本古典文学全集）でも、久米仙人でなく主人公の金十郎が墜落したのに対して、「雲の破れから落ちかゝりしは、久米の仙人二代の後胤ともいふべし」と記されたりする。また、江戸後期から福井の町で絵馬や天神画を製作・販売していたらしい「夢楽洞」の初代は「万司仙人」と名乗ったが、「小林家文書の雑俳句額を写した綴りには、それぞれに戯文が書き添えられており」、その中には「久米仙人の説話をもじり、遊女を目にした万司仙人が『通ふ』（通力）を失い、煩悩を起こすというくだり」が見られもするようである（『福井県史』通史編４の第五章第二節二「夢楽洞万司」）。あるいは、山東京伝の黄表紙『早雲小金軽業希術艶哉女僊人』（山東京伝全集）の場合、久米仙人自体が登場してはいるが、墜落するのは久米仙人でなく、女仙人が久米仙人の前に墜落する。その女仙人とは、琴高仙人の娘という小きん仙人。「ふと雲の上より、久米之介が鼻の大きなるを見初め、たちまち通を失つて落ちる」。「久米之介」は後に、久米仙人となる。久米仙人墜落説話を、男女逆転させて利用しているのである。「脛の白き」でなく「鼻の大きなる」を見て落ちたとする点も含め、先の川柳「稲荷山通を失ふ女仙人」が思い合わせられよう。

自らのものであれ他者のものであれ、失敗というものは、一つの教訓をも生む。久米仙人の墜落説話は久米仙人の失敗譚でもあって、それを教訓に利用した事例も出現した。石門心学の手島堵庵による安永二年（一七七三）イロハ教訓歌『いろはうた』の中に

久米の仙人おかしひことよ
うそのかはみてだまされた

と見える。洗濯する女の白い脛を見て墜落したことを「うそのかはみてだまされた」と表現して、本質を見ないことを戒める教訓としたものであるに違いない。右の『いろはうた』は、手島『〈児女〉ねむりさまし』（石門心学書集成）に

収載されているほか、『手嶋先生いろは歌』（同上）として刊行されてもおり、後者の場合には各歌に絵が添えられているが、右「久米の仙人」歌の絵に画かれる脛を出して踏み洗いする女は、顔がまるで牙をむき出しにした化け物のように見える。「久米の仙人」が女の本質を見ていなかったことを、絵でも示しているのであろう。

久米仙人墜落説話を題材とした種々の絵画作品が多く生み出されたことは広く知られるところであって、先の西野論文にも列挙されている。上空から洗濯の女を見つめる久米仙人を右上あるいは左上に、まだ何も知らずに川で洗濯する女を左下あるいは右下に配して描いたり、真逆さまに墜落して今まさに地上に叩きつけられようとしている久米仙人と、それを見て仰天する洗濯の女とを、左右に配して画いたり、等々。結婚したあとの久米仙人と洗濯の女を画いた曾我蕭白の『久米仙人図屏風』[14]も知られる。また、日本浮世絵博物館所蔵『久米仙人図』は、余程の高位の武家が、京都の浮世絵師西川祐信の画いた踏み洗いする美人の絵の上方に、将軍家の御用絵師として君臨した狩野派の絵師狩野祐清英信に頼んで落ちてくる久米仙人を画かせ、さらに、林大学頭に依嘱して画賛を加えてもらったものと推測され、「当世風に描かれた濃彩の浮世絵美人、すなわち流行の俗に、古風な水墨描法で描かれた仙人、すなわち不易（ふえき）の雅が降参するという、十八世紀の中ごろ以降急速に進行する雅俗の価値の転倒がまさしくここに視覚的に示されているといって過言ではないだろう」「時流の変化に気付かずに依然として旧弊を守る権威の側の滑稽さがいやまして強調されている」「雅俗転倒の風刺がみごとに利いた、いささか毒気を含んだ画賛物としてまとまっている」と評されている。[15]久米仙人が女のもとに落ちる墜落説話を利用して、雅が俗に降参するという雅俗転倒について風刺しているのである。祐信の影響を強く受けた鈴木春信には東京国立博物館所蔵の柱絵版錦絵『見立久米仙人』があるが、その春信に対して「二世春信を気どって鈴木春重と称した」という司馬江漢による『遊女図』は、「未だ春信風を多分に残し、柳腰の楚々としたスタイル」で、洗濯している訳ではなく普通に立っている遊女を画き、その上方に「仙人の落てなたかき女かな」と記す（日本の

美術232『江漢と田善』)。久米仙人から通力を奪った女に見立てているのだろう。

こうした絵画作品でなくて立体的な造形作品に久米仙人墜落説話が題材として利用された事例も知られる。日本三大美祭の一つとして名高く、昨年にはユネスコの無形文化遺産への登録も決まった飛騨高山の高山祭では、春秋二回の祭に計二十三基の華麗な屋台が曳き出される。そのうち桜山八幡神社の例祭である秋祭に出る下三之町上組の仙人台は、「最古の屋台の一つ」で、「寛政五年(一七九三)頃には仙人台と称していたことも、記録によって明らか」なものである。その仙人台の上段前部に今は仙人像が置かれているだけだが、「はじめは操り人形として籾の仙人があり、洗濯中の美女の白肌を見て墜落するという演技で人気があった」、しかし「代官所からの達しで中止となった」、と伝わる。[16] 久米仙人墜落説話が祭りの屋台に見せ場を作るために利用され、からくり人形によって再現されていたようである。また、『武江年表』(江戸双書)安政三年(一八五六)に

二月より、浅草寺奥山に活偶人見せ物再び始む。〈肥後松本喜三郎が作なり。水滸伝の豪傑、忠臣蔵夜討、鏡山浄瑠璃狂言の偶人、一ツ家の姥、為朝に島人遊女屋内証の体、久米の仙人布洗女など、活けるが如く造りたり。この仮屋間口十三間奥行十四間にて、偶人の数六十二なり。見せ物を開けるうちの壮観なり。〉

とある。「活けるが如く造りたり」という生人形の見世物興行を、幕末から明治期にかけて生人形の製作者として活躍した松本喜三郎が、浅草寺奥山で行ったことを伝えるが、[17] 展示された生人形の中に「久米の仙人布洗女」が含まれている。近年、生人形や見世物が随分と注目を受けるようになって、最近にも「見世物大博覧会」展が国立民族学博物館および国立歴史民俗博物館にて開催され、右興行の絵本番付『正うつし生人形』や、右興行の生人形を画いた安政三年国芳画『当盛見立人形之内　籾の仙人』が出品された。[18] さらに、同年の国貞画『人形之図』も知られる。[19] それらによって、川へと顔から真逆さまに墜落する久米仙人と、それに驚いて尻餅をついた洗濯の女とを、生人形に造ったものであった

とわかる。久米仙人墜落説話が生人形興行に題材として利用されたのである。

先に見た『列僊寿娯禄』は、右に粗描してきたような近世以前の久米仙人墜落説話利用史の中に一コマとして組み入れられるべきものであるに違いない。同説話が絵双六の中に画かれているのであるから、先述通り数々の絵画作品に同説話が題材として利用されてきた、その流れの中にあるものでもあろう。あるいは、久米仙人墜落説話を盛り込むことによって遊戯性の一層高い絵双六に仕立てているという点では、先に取り上げたような、同説話を趣向の根幹に据えて滑稽味溢れる笑話を構成した事例などと、同説話の利用のあり方において一脈通じ合うものを看取することもできるかもしれない。しかし、絵双六のようなまさにゲームに仕掛けとして巧みに利用された事例や、ゲームであれ何であれ説話の内容を享受者に擬似体験させるという仕掛けを備えた事例は、管見に入らず、他に知られないであろうか。とすれば、本拙稿にて取り上げた『列僊寿娯禄』という事例は、近世以前の久米仙人墜落説話利用史の中に組み入れられるべき、ほんの小さな一コマではあるが、同時にまた新鮮で特徴的な一コマなのでもあって、それを加えることによって、右の粗描からも窺える通り多分野に亘って実に多彩な同利用史が、さらに一層分厚いものになると言えよう。

2　ゆるキャラへの転用―近代以降―

久米仙人墜落説話の利用は、近世にピークを迎えていて、それに比べて近代以降においてはかなり下火になっているのかとも見られるが、利用例が殊に少ないというわけではない。例えば、漱石にも明治二十九年に「真倒しに久米仙降るや春の雲」（漱石全集）という句がある。あるいは、久生十蘭『平賀源内捕物帳』「萩寺の女」（定本久生十蘭全集）には「久米（くめ）の仙人でもあるまいし、隕石が路考贔屓の娘ばかり選んで落ちかゝるといふわけはなからうぢやないか。だから、これは、隕石などの仕業ぢやない」という「源内先生」の言葉が見えるし、坂口安吾『行雲流水』（坂口安吾全集）

も、「まだ十八」の「パンスケ」（売春婦）であるソノ子について「お乳とお尻がにわかにムッチリと精気をこめて張りかゞやいているようであった」、また「あのお尻が行雲流水していやがるか、と、和尚もいさゝか妬たましく感じる」などと叙述したあとに、「『当世は、久米の仙人などはショッチュウ目玉をまわしていなきゃならないのさ。オレだから、ガンバッていられるようなものだ』と、和尚はわずかに慰めるのである」と続ける。明治四十四年の薄田泣菫の紀行文『久米の仙人』（薄田泣菫全集）が「世の中の人は――わけて両性の関係を口喧しく言ひながら、家庭では十人の子供を産まうといふ道徳家などは、まるで自分が生殖不能者ででもあるやうに、なんぞといつてはこの話を引張り出して、笑ひ事の一つにしようとするらしい」と言うように、久米仙人墜落説話を何らかの形で例話などに利用することは、種々の作品に限らず日常会話などにおいても、近代以降にも広く行われてきたに違いない。例えば、財団法人日本医薬情報センター発行の『ＪＡＰＩＣ　ＮＥＷＳ』333（平24）に掲載される、会長の首藤紘一氏による巻頭言「長寿」には、「長寿の究極は、不老不死であり、不死身である。……不老不死というと仙人である。……変わった仙人として、わが国では雲に乗っていた久米仙人が美女の姿に惑わされ雲から墜ちたという話がある」と、同説話が持ち出されている。

『木戸孝允日記』（日本史籍協会叢書）明治五年十月十一日条は、

白はきに見とれもせぬに百ポンドとんと落たる久米の仙人

という狂歌を挙げて、「是は、久米の風姿甚雅朴、人称仙人。然るに、同人平素倹素、猥りに不散。豈図、又係此難。依有此戯」と説明する。「久米」とは久米邦武のことで、人が彼を「仙人」と称したところから久米邦武を「久米の仙人」とし、それに応じて久米仙人墜落説話を持ち出し「白はきに見とれもせぬに……」と、「内部の苦境を凌ぐ為に事情に疎き日本人の預金を集めて糊塗せん」とする銀行に「金百五十磅」を預金した邦武の「銀行取引に慣れぬ失敗[20]」を皮肉っているようである。

先の西野論文も取り上げ検討する事例だが、宮武外骨による滑稽新聞定期増刊『絵葉書世界』（筑摩書房刊影印）の明治四十一年十一月刊行第十九集に「出歯久米」と題する絵葉書一葉が載る。中央やや左に脛を出して踏み洗いする女性、右上に落下する久米仙人の片手を画く。左下に『徒然草』第八段を掲げて「（絵本徒然草）」と注記したうえで、その下方に「西川祐信画」と書くから、西川祐信画『絵本徒然草』に基づくものらしい。植木職人の池田亀太郎が覗き見をした挙句に女性を殺害したという明治四十一年三月の出歯亀事件を、洗濯する女を覗いて久米仙人が墜落した話と重ね合わせて、「出歯亀」を「出歯久米」ともじったのである。

西野論文は、右の「出歯久米」とも関わらせて、鳥山明の漫画・アニメ作品『ドラゴンボール』に登場する「亀仙人」も「久米仙人」をもじったものであると指摘するが、先述の近世以前の演劇作品を経て時代が下ると、テレビドラマの脚本に久米仙人墜落説話が利用された事例を拾うこともできる。御荘金吾の『久米仙人』[21]がそれで、久米仙人関連の諸話を踏まえた異説久米仙人物語とも言うべきもの。その中で、「現世の苦を厭うて」修行した結果、昇仙して仙界に至った久米が、墜落してただの人間に戻ったあと、振り返ってこう語る。

現世の苦痛があってこそ、神仙の楽園は尊いもの。苦しみと悲しみがあればこそ人間は楽しみと悦びに、憧れもするのです。私はその楽園の中で、また人間世界の苦しみと悲しみを憧れ始めたのです。私はある日空を飛び歩いていて、人間の世界への憧れが胸一杯になりました。それというのが、眼下の吉野川のほとりで白い脛をくっきり出して、布を洗濯（すすい）でいる若い女を見たからです。私はこの女にせつない位の色慾を感じると同時に、天空から真ッ逆さまに吉野川へ落ち込んですっかり神仙の術を失ってしまったのです。私はそのままその百姓娘の帑加と夫婦（みょうと）になり、元の人間の生活を始めましたが、帑加という女はひどい淫奔女で、次ぎから次ぎに男を作り、亭主の私を苦しめるのですが、私はそれを不幸とは考えておりません。私にはまた新しい夢が出来たからです。新しい憧れが出来

たからでございます。

先引『俄仙人戯言日記』では、単に洗濯女の脛を見て墜落したというのではなく、「色男」の久米仙人が「仙界」の「仙女」たちに惚れられ「つけ廻されるつらさ」ゆえに地上に戻った際に墜落するし、先述の『久米仙人吉野桜』では川辺の岩明神の霊力のために墜落するのだが、右の場合は、神仙の楽園にいながら人間世界の苦しみと悲しみに憧れ始めるという、同世界に対する心情の変化が墜落へと繋がったとする。

武者小路実篤が久米仙人墜落説話を題材に利用して書いた短編小説『久米仙人』（武者小路実篤全集）も、近似する解釈を示す。「地上の生活がいやに」なり「人間には愛想をつかし」て修行したあと、「遂に雲にのつて」「天上界」に向け「地上をいよ〳〵はなれると云ふ時」、ふと「地上を見た」際に「その美しさにおどろ」くとともに、人間が「寧ろ一個の愛すべきもの、可哀さうなものに思へ」て、「涙が、ぽとぽとと二滴、地上に落つこちた」と同時に、「久米仙人が真さかさまに地上めがけておつこちた」、そして、そこで洗濯していた女達が「久米仙人のおちた理由を自分達の脛の美しさに帰してよろこんだ」（先掲江戸笑話の自惚れ女に通じる）、とする。さらに、実篤『久米仙人』の数年後、大正十四年十月の『早稲田文学』に発表された小寺融吉の戯曲『久米の仙人』[22]（日本戯曲全集）でも、久米の仙人が「昇つてみれば、いつかうに面白くなかつたよ。……その筈。天は鳥の住むところ、人間の住むところではない。始めわしは、都の者どもの有様が呪はしく、嵩じて地の上がいとはしうなり、厭離穢土の一念発起して仏門に入つたが、今日に至つて始めて、人間の住むべき誠の地の上を知つたのだ。欣求浄土とは即ちこゝだ。……今日はじめて、こゝの空を飛行（ひぎやう）する中、たま〳〵下を見下（おろ）すと、此の仁（じん）たちが、あゝ、人間本来の邪念のない姿で、たはむれ遊ぶ楽しさ、まして、そこらのをなごどもの脛（はぎ）の白さのゆかしさ、なつかしさ」と語っている。御荘にこれら先行作の影響を受けた面があったか否かはわからない。いずれにせよ、同様の近代的解釈を久米仙人墜落説話に施して、それを、小寺は戯曲に、御荘

はドラマ脚本に盛り込み、実篤は短編小説に仕立てたようである。なお、先の薄田泣菫『久米の仙人』が「久米の仙人は翮を打たれた鳥のやうに、もんどりうつて小河の河つ縁に落ちて来た。その刹那に新しい価値の世界の薄明が、かすかに動いたに相違ない」と述べるのや、坂口安吾「教祖の文学―小林秀雄論―」（坂口安吾全集）が「小林秀雄が水道橋のプラットホームから墜落」したことと対比して「本当の美、本当に悲壮なる美は、久米の仙人が見たのである。いや、久米の仙人の墜落自体が美といふものではないか」と言うのも、類似の捉え方だろうか。

『和州久米寺流記』において、来目皇子を開基としつつ久米仙人をも排除せず宣揚に利用しようとする思惑が垣間見えること、前節に述べたが、その点は、近代以降もあまり変わらないものと見受けられる。明治十六年再刷『真言根本大和圀高市郡霊禅山久米寺畧記』（『略縁起　資料と研究』1）の場合、久米仙人については末尾に「かゝる勝地なれは久目仙人も跡を遺して西方を指して飛去り給ひけり」と触れるだけなので、『和州久米寺流記』に比べ同仙人を随分後退させているようであるけれども、本堂内には薄田泣菫『久米の仙人』が「埃だらけの堂のなかで、相変らず婦人でも抱かうとするやうな、妙な手つきをして龕のなかに納まつてゐた」と記す、久米仙人自刻という同仙人木像を安置していたし、境内にも同仙人石像が造立されている。そして、現在久米寺から発行されているパンフレットでは、来目皇子による開基などについて記したあと、「久米仙人との関係」や「久米仙人ゆかりの寺で中風除け、あじさい供養とカボチャを食す」という項目を設けて、全体の半ばほどを久米仙人関係の記事で埋めているのである。そのパンフレットは墜落説話に言及していないが、久米寺で販売されている絵馬には久米仙人と洗濯する女が画かれているし、キーホルダーにも覗くと洗濯の女と久米仙人が見えるという仕掛けが施されている。久米仙人墜落説話がまさに、寺院宣揚に利用されているのである。さらに、戦後に始まったもののようだが、毎年十月の仙人祭に行われる仙人踊りでは、久米仙人に扮した女性が、手にした杖で踊る女性の着物の裾をめくり上げる仕草をする。やはり久米仙人墜落説話を象ったものである。

現代における利用例として特に興味深く思えるのは、久米仙人がゆるキャラへと転用された事例である。岡山県津山市久米（平成大合併以前は久米郡久米町）でのこと、平成六年度にむらおこし事業として「久米町仙人の里構想」が発足し、久米仙人が久米町のキャラクターに起用された（『平成六年度むらおこし事業報告書』久米町商工会　後掲図5参照）。ぽっちゃり体型で、丸い顔に小さな目、丸い鼻、サンタクロースのような白い顎髭と眉。好色のイメージなどは微塵も持ち合せていない。特に近世以降に数限りなく画かれてきた久米仙人の絵像の中に類例を見出すことが恐らくはできないであろうと思われる、新たな久米仙人像である。亀を背負いサングラスをかけている『ドラゴンボール』の亀仙人と比べても、そちらの方がまだ、伝統的な久米仙人像に近いと思えるほどだ。ゆるキャラブームの中にあって、久米仙人が完全にゆるキャラ化したものであるに違いない。現在、町内を東西に流れる久米川に架けられた千代下橋には、そのゆるキャラ化した久米仙人の人形が置かれているし、道の駅「久米の里」では、ゆるキャラ・久米仙人を象った、たい焼き風の「久米仙人焼」が販売されたりもする。例えば『久米町制施行50周年記念　久米町町勢要覧』（久米町役場、平17）に、右の久米川を舞台とする久米仙人墜落説話が「昔話」として掲載されており、その存在が、久米の地と久米仙人を繋ぎ、久米仙人をキャラクターに起用する主要な根拠となっているようである。しかし、同説話が「昔話」としてこの久米の地に古くから根付いていた形跡は見当たらず、本来の久米仙人墜落説話をもとに舞台だけを岡山県津山市久米の久米川に移して、新たに生み出されたものなのではないかと疑われる。いずれにせよ、久米仙人墜落説話がむらおこし事業あるいは観光として利用された、実に現代的な利用例であるに違いない。[23]

なお、前章に触れた『絵本集艸』所収佚題絵本でも、久米仙人墜落説話の舞台を大阪横堀に移していたし、先述の『烟花漫筆』も難波の道頓堀としていた。また、国芳『木曽街道六十九次』では、「落合」宿の絵として、「晒女」の前に墜落する久米仙人を画く。墜落後に二人が結婚したという伝承を踏まえて、「落合」宿の絵としているようである。さらに、

先の西野論文の取り上げる『大和名所図会』などでは墜落の地を久米寺近くの芋洗芝だとする。そもそもより古く『今昔物語集』などは久米仙人が墜落したのを吉野川とするが、『七大寺巡礼私記』などは同じ大和国の中の久米川とする。久米仙人墜落説話の長い伝承史の中にあっては、その舞台の移動は決して珍しいことではないとも言えるだろうか。

以上、近世以前に引き続いて近代以降の事例を拾えるままに拾ってきたに過ぎないものの、久米仙人をゆるキャラ化してのむらおこし事業への利用あるいはテレビドラマや漫画・アニメへの利用といった、いかにも現代的な利用例にまで辿り着くことができた。しかし、『列僊寿娯禄』が仕掛けたのと同様の擬似体験を享受者にもたらすような事例、擬似体験型のゲームあるいはアトラクションに久米仙人墜落説話が利用された事例は、近代以降においても見出せはしなかった。また、演劇作品やテレビドラマ、高山祭のからくり人形、久米寺での仙人踊りなどは、『列僊寿娯禄』と同様に久米仙人墜落説話を再現する面はあっても、それを享受者に擬似体験させるものではない。そういう意味において、『列僊寿娯禄』に見られる久米仙人墜落説話の利用は、中世あるいは古代から近現代まで脈々と続く同説話の長い利用史の中にあって、突出した一面を持っているということになるだろうか。

付記　久米仙人墜落説話利用実記

このような個人的体験を記すというのは研究論文に相応しくないのだろうが、しかし、ごく微細なものとはいえ、その体験も久米仙人墜落説話利用史の中の一コマであるには違いない。それで、敢えてここに付記することとした次第である。

京都女子大学図書館よりの依頼を受けて、平成二十五年秋季（十月七日～十一月四日）開催の第十三回図書館資料特別展観の企画や実施に携わった。同図書館に収蔵されて間もない、本拙稿にて取り上げた『列僊寿娯禄』を展観の一つの核にするということだけは、早くに決めていたが、それ以外はなかなか決定に至らなかった。展示対象が大学の図書館の所蔵する資料に限定さ

れているため、相応しいと思われるテーマを思い付いても、それに見合った資料を少なくとも四、五十点くらいは図書館資料によって揃えることができないと、そのテーマでの展示は成り立ち得ないので、テーマの設定自体も一筋縄ではいかず、仮にテーマを設定しては展示資料が揃うか否か検討する、という作業を何度か繰り返さなければならなかった。それで、「ワンダーランド仏教説話」というテーマがほぼ固まったのは、もう五月になってからであった。そうしたテーマとは別に、展示解説をいかなる形にするのかについては、かなり以前から朧気ながら想い画いていたことがあった。前年度の第十二回展観も担当し、「長明と清盛―ゆく川、海へ―」というテーマで展示した際に、京都女子学園マスコットキャラクター「ふじのちゃん」が建春門院に扮して展観の案内をしたり解説の随所でコメントを加えたりするというスタイルにしたところ概ね好評であったようなので、今度は全面的にふじのちゃんが解説するという形にしたいと考えていたのである。ところが、いかなる設定のもとにふじのちゃんに解説させるのがよいのか、単に解説の語り手をふじのちゃんにするというだけでは面白味に欠けるし……と、考えあぐねていた際にふと思い付いたのが、久米仙人の起用であった。久米仙人を仕掛けとして巧みに利用していた『列僊寿娯禄』が、展観の一つの核として常に念頭にあったからでもあろう。

その後、通力を取り戻し、仙人であるのでずっと生き続けてきた久米仙人が、現代ではもう川で洗濯している女性もいないからと安心して空を飛び回っていたところ、京都女子大学の上空に来た際に女子大生を見て昔のことを思い出し、またもや通力を失い墜落してしまった。落ちた場所が、展観会場の建学記念館「錦華殿」で展観の案内役の練習をしていたふじのちゃんの目の前で、結果、二人が一緒に案内・解説することになる。――というのが、最終的に辿り着いた設定である。それに応じて、テーマ「ワンダーランド仏教説話」に「ふじのちゃん・久米の仙人 二人語り」という角書きを加え、また、「京女に久米の仙人が落ちてきた!?」という副題（キャッチコピー）を添えもした。そして、展観図録では、基本的には二人の掛け合いだけで解説が展開する形にし、展観会場でもそのエッセンスをパネルとして掲げた。右の設定については、全六章のうち第Ⅰ章「『久米の仙人』って、誰?」の冒頭部で、二人に次の通りの会話をさせてもいる。〈久〉は久米仙人、〈ふ〉はふじのちゃん。

〈久〉じゃが、ふじのちゃんが図書展観の案内役の練習をしておったところへ、たまたまワシが落ちたんじゃの。なのに、ワシを紹介するコーナーが、その図書展観の最初にあるというのは、ワシが落ちて一緒に案内することが初めからわかっ

てたみたいで、何か辻褄が合わん気がするが…。

〈ふ〉あんた、悠々と空飛んでたわりには細かいこと気にすんのね。そんなんじゃ、ますます女の子に嫌われるわよ。

また、右の設定に少しでもリアリティーを与えるために、ここがまさに久米仙人の落ちてきた場所なのだという久米仙人落下地点を、床に細工するなどして展観会場内に設定しようとも考えたが、技術的に上手くいかず、むしろリアリティーの乏しさをこそ利用する形に方向転換することにした。つまり、「久米の仙人落下地点」と書いた矢印状の簡単な立て札を会場内に置いて、しかも固定しないで簡単に動かせるようにした。そのうえで、ふじのちゃんと久米仙人にこう会話させもした。

〈ふ〉うそっ。そんなわけないでしょ。ホラ吹きじじいね。あんた、ほんとに久米の仙人？　…そう言えば、この展観会場には「久米の仙人落下地点」と書いた立て札が置いてあるけど、置いてある場所が日によって少しずつ違ってるような気がするのよね。それに、屋根なんかちっとも壊れてないし。そんなの、変じゃない。何か手品みたいなの使ってわたしの目の前に落ちてきたように見せかけて、こっそり侵入してきたんじゃないの？

〈久〉考え過ぎじゃ。仙人じゃからな、壁をすり抜けたりもできるんで、屋根も通り抜けてきたんじゃろう、きっと…。立て札のことは知らんがのう。

久米仙人墜落説話に関する資料が展示されたり、同説話をテーマ（の一端）とする展示が行われたりすることはあっても、右のような形で図書展観に利用されたことは従来なかったのではないかと思われる。図書展観に久米仙人墜落説話を利用したのは、誰もが持ち合わせる性的側面を明るくユーモラスに切り出したとも言うべき有名な同話を展観会場と直結させることによって、少しでも関心を喚起して興味深く親しみを持って楽しんでもらおうと意図したものであった。来場者の反応などから見てある程度の効果はあったのかと思われるが、正確にはわからない。一番楽しんだのが稿者自身であったことは確かだが。

なお、右の利用例では、久米仙人墜落説話の舞台を、当初の大和国から京都女子大学へと移動したというわけではない。当初の墜落はそのままに、千年以上の時を隔てた現代において再び、舞台を変えて墜落させたのである。その点、先の諸例とは異なる。時空を超えて自在に渡り歩き得るという、仙人なる存在の特性を、できる限り有効に利用しようとした結果でもある。

（1）第四段第6列の「林霊素」を「りんれいさく」、第五段第10列の「欒巴」を「れんは」と仮名書きするのは、単純な誤読によるものか。

（2）「選仙図」さらには広く絵双六に関して、有坂與太郎氏『玩具叢書　日本玩具史篇』（雄山閣、昭9）、麻国鈞・麻淑雲両氏『中華伝統遊戯大全』（新華書店北京発行所、一九九〇）「升官図」「選仙図」項、増川宏一氏『すごろくⅡ』（法政大学出版局、平7）、岩城紀子氏「浄土双六考」（『東京都江戸東京博物館研究報告』1、平7）、森田憲司氏「二〇〇九年奈良大学図書館展示『陞官図―中国の出世スゴロク』解説」（電子版）、桝田静代氏「絵双六考（二）その表現と構造を曼荼羅的世界に見る―浄土双六から一般的な絵双六まで」（『遊戯史研究』22、平22）など参照。

（3）斉匡と田安家について、辻達也氏編『新稿一橋徳川家記』（続群書類従完成会、昭58）や日本書誌学大系94『田藩文庫目録と研究』（青裳堂書店、平18）、辻達也氏『江戸幕府政治史研究』（続群書類従完成会、平8）第九章「徳川御三卿の性格」参照。

（4）ただし、「すごろく」の「す」に「寿」という字を宛てた例は他にも多く知られるし、また「ろく」に「禄」を宛てた例も見られる。山本正勝氏「雙六遊考3　絵雙六の歴史その一」（『日本美術工芸』570、昭61）参照。

（5）『列仙全伝』の受容については、拙稿「古典文学の神仙世界と道教」（講座道教第六巻『アジア諸地域と道教』雄山閣、平13）あるいは拙稿「新刊紹介　坂出祥伸『江戸期の道教崇拝者たち：谷口一雲・大江文坡・大神貫道・中山城山・平田篤胤』」（『日本宗教文化史研究』20-1、平28）においても略述している。後述の鉄斎との関係については、拙稿「鉄斎の楽園　『口出蓬莱図』をめぐって」（『アジア遊学』82、平17）参照。やはり後述の『異形仙人つくし』については、拙稿「浮世房の尸解　付『異形仙人つくし』覚書」（『女子大国文』128、平12）にて若干の検討を加えた。最近に京都大学所蔵本の画像が公開されてもいる（http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/kichosearch/src/ippan12.html）。編末に掲げる《『列僊寿娯禄』各マス記載事項等一覧》にて取り上げている『仙仏奇踪』と『列仙全伝』との関係、あるいは『後素集』について、北野良枝氏「『後素集』と舶載された絵入り版本との関係に関する研究―『列仙全伝』『仙仏奇踪』を中心に―」（『鹿島美術研究』年報32号別冊、平27）など参照。同様に《『列僊寿娯禄』各マス記載事項等一覧》に取り

上げた『仙人つくし』については、小野尚志氏「奈良絵本『仙人つくし』について―付・翻刻―」（『帝京大学文学部紀要』国語国文学26、平7）参照。なお、『列僊寿娯禄』に見られる個々の仙人の絵について、今回は充分に検討し得ていない。

（6）神戸市立博物館所蔵作品については神戸市立博物館南蛮美術企画展図録『若芝と鶴亭―黄檗宗の画家たち―』（平23）、八幡山前懸については『祇園祭大展―山鉾名宝を中心に―』（祇園祭山鉾連合会・京都府京都文化博物館・京都新聞社、平6）、金蔵寺所蔵作品については『加美町の絵画・書』（加美町教育委員会、平16）、など各々参照。また、中国の事例について、王樹村氏『中国吉祥図集成』（河北人民出版社、一九九二）など参照。あるいは、ここに注目する群仙図に触れるところはないが、寿老人の図像に関して、出光佐千子氏「寿老人と理想郷」（『ユートピア―画かれし夢と楽園』（出光美術館、平21）も参照。

（7）例えば、日光山輪王寺宝物殿にて「田安斉匡とその時代」という展示が開催され（平14～平15）、斉匡筆『牡丹図』などが展示された。

（8）出目「一」～「六」のうち、移動先が示された「一」「三」以外、「二」「四」の場合は数字だけが記載され移動先が示されておらず、「五」「六」は数字自体も記載されていない。同じく移動先を示さないのに数字だけは記載するのとそうでないのとの差がどこにあるのか、詳細不明。

（9）棚橋正博氏「絵本考㈢―大惣旧蔵『絵本あつめ草』について―」（『帝京大学文学部紀要（国語国文学）』15、昭58）。

（10）未翻刻の作品のようだが、井上隆明氏『喜三二の戯作本研究』（三樹書房、昭58）に詳細な解題が備わる。

（11）久米仙人関係の川柳について、江口孝夫氏『江戸川柳の美学3　もじりとやじり―光る批判精神』（勉誠出版、平14）V「すこたん久米仙」参照。

（12）金沢美術工芸大学付属図書館「近世絵手本画譜類画像検索データベース」（http://www.kanazawa-bidai.ac.jp/tosyokan/edehon/main1.htm）による。

（13）林美一氏の江戸艶本集成第七巻『喜多川歌麿続』（河出書房新社、平24）に収載。また、『艶説秘事枕』下巻の口絵には、男は画かず、陰毛まで見せて川で踏み洗いする女を画き、右上に「久米の仙人はぎの白きを見て通をうしなふ」と記し

ている（http://livedoor.4.blogimg.jp/kinisoku/imgs/5/6/-56633625.jpg 参照）。

（14）ただし、この『久米仙人図屏風』は近年、「本来は久米仙人図ではなく、実は龐居士と霊照女を描いたもの」で、「龐居士を色欲ゆえに法力を失った久米仙人に見立て、その好色な視線を娘の霊照女に向けるこの屏風は、禅宗絵画に世界を借りたあぶな絵であり、ちょっとあぶない絵である」（佐藤康宏氏『若冲・蕭白』〈新編名宝日本の美術27、平3〉、118頁以下）と捉え直されているようである。

（15）小林忠氏「雅俗の呼応―本画と浮世絵」（同氏『江戸の絵画』藝華書院、平22）。小林忠氏『江戸の浮世絵』（藝華書院、平21）は、同様の別の事例、北尾重政・狩野永徳高信『久米仙人図』も取り上げている。

（16）高山祭について、『高山祭の屋台』（高山市観光課、昭49）参照。引用も、同書よりのもの。

（17）この生人形興行については、木下直之氏『美術という見世物』（平凡社、平5）76頁以下、あるいは同氏「生人形の見世物と展覧会について」（『生人形と松本喜三郎』熊本市現代美術館・大阪歴史博物館、平16）参照。

（18）同展図録119・121頁に写真が掲載されている。両者は無論近似するが、『正うつし生人形』には尻餅をついた女の前にひっくり返った盥が画かれているのに対して、国芳の絵にはそれがない。絵本番付である前者の方が、生人形の実際とより合致しているのだろう。同じ国芳による嘉永五年（一八五二）『木曽街道六十九次』「落合」は、その盥も含めて右の絵本番付と近似する。松本喜三郎は、そちらの国芳画を参照したのかもしれない。なお、盥を除けば、先述の『艶本多歌羅久良』所載の絵とも近い。

（19）この生人形興行と浮世絵との関係を、河治和香の小説『国芳一門浮世絵草紙5　命毛』（小学館文庫、平23）は、「その洗濯娘はふくらはぎどころか、赤い腰巻きの奥には毛まではっきりと見えたから、その本当の娘のような柔肌の質感は、男達の性的好奇心をも十分に満たす代物で、連日、大賑わいだという。この人気に浮世絵が乗じないわけはなく、国芳たちもどんどん活人形を絵にすると、またこれが評判になって、活人形にもますます人が集まり、浮世絵も売れるといううれしい相乗作用が生まれた」（139～140頁）と描く。

（20）『久米博士九十年回顧録』（早稲田大学出版部、昭9）下巻第二一三項。

（21）御荘金吾編『テレビ・ドラマ　理論と作品』（宝文館出版、昭58）に収載されている。放映はされていないか。
（22）平成二十年七月、東京両国シアターXにおける第二十七回シアターX名作劇場にて上演された。
（23）説話が「観光マチおこし」に利用された事例についての最近の研究として、田野登氏「柴右衛門狸伝承の一展開―洲本市の観光マチおこしにおける道頓堀中座楽屋話との関連―」（『日本民俗学』265、平23）がある。

※引用に際しては、基本的に通行字体に改めるとともに、句読点を加えるなどした。御高配を賜りました京都女子大学図書館の関係各位に深謝申し上げます。

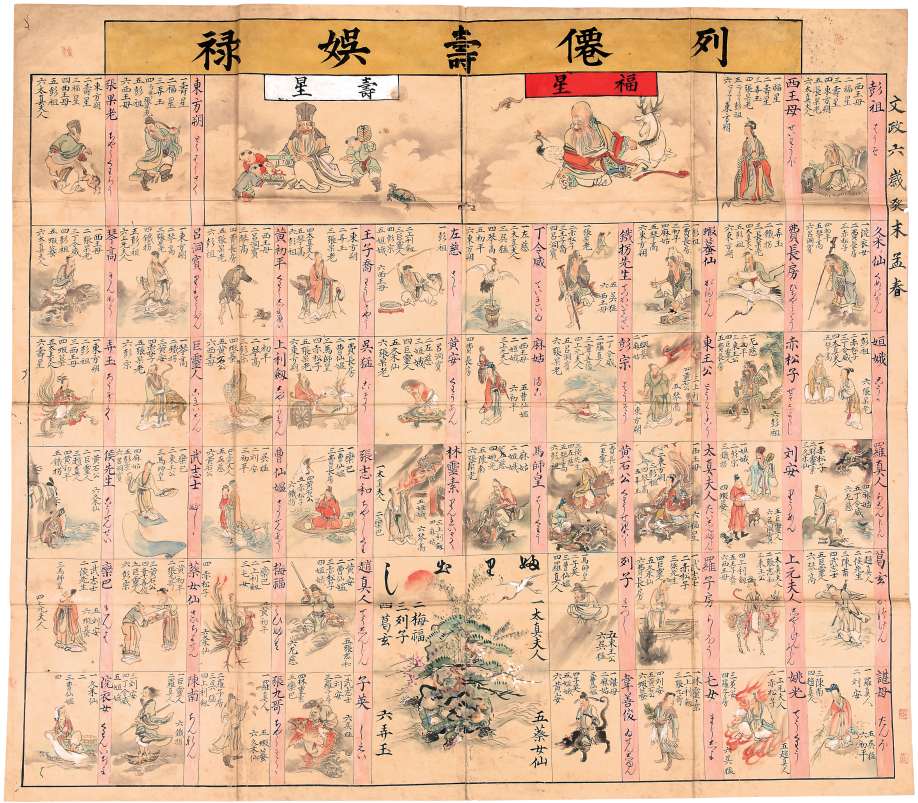

図1　京都女子大学図書館所蔵『列僊寿娯禄』

図2　京都女子大学図書館所蔵『列僊寿娯禄』・構成図

	1列	2列	3列	4列	5列	6列	7列	8列	9列	10列
一段	彭祖	西王母	福星			寿星			東方朔	張果老
二段	久米ノ仙	費長房	蝦蟇仙	鉄拐先生	丁令威	左慈	王子喬	黄初平	呂洞賓	琴高
三段	姮娥	赤松子	東王公	彭宗	麻姑	黄安	呉猛	上利剣	巨霊人	弄玉
四段	羅真人	劉安	太真夫人	黄石公	馬師皇	林霊素	張志和	曹仙媼	武志士	侯先生
五段	葛玄	上元夫人	羅子房	列子		ふり出し	趙真人	梅福	蔡女仙	欒巴
六段	諶母	姚光	毛女	韋善俊			子英	張九哥	陳南	浣衣女

図 4

図 3

図 5

図 3　『列僊寿娯禄』二 1　久米ノ仙
図 4　『列僊寿娯禄』六10　浣衣女
図 5　岡山県津山市久米のむらおこしキャラクター「久米仙人」
（作州津山商工会久米支所作成 http://www.shokokai.or.jp/chiiki/33/3366410000/index.htm より）

《『列僊寿娯禄』各マス記載事項等一覧》

・各マスに示された仙人名（上がりとふり出しを除く　漢字＋平仮名）を掲げ、次行には、各マスの絵がいかなる場面を画いたものと見られるのかを略記した。なお、例えば一1は、第一段第一列のマス。

・仙人名を挙げた下には、各マス所載の仙人の絵と、『列仙全伝』（略称「全」）『仙仏奇踪』（「奇」）『仙人つくし』（「つ」）『異形仙人つくし』（「異」）『列仙図賛』（「図」）に掲載のそれぞれの絵との類似度を、高い順に◎○△×という記号で示した。◎の場合は、ほとんど完全に一致していることを示す。××は、当該仙人に対する記事は見えるが絵がないことを示す。絵も記事もない文献については、そもそもその略称を挙げない。なお、『列仙全伝』については、第何巻に所在するのかを（　）内に示しもした。

・↓以下には、当該マスに示された次の行き先のマスを示した。その際、より上段のマスには実線、より下段のマスには波線を引き、それが何段上あるいは下であるのかを、各傍線の上に数字で示した。例えば一1の項目の中の「四3」の場合、四3のマスが、一1の属する第一段よりも三段下に属するマスであることを示す。なお、上がりは最上段のさらに上段、ふり出しは最下段のさらに下段に、各々位置するものとして扱った。

・↑以下には、当該マスを行き先として指定しているマスをすべて列記した。

・その他、補足的なことがらなどは必要に応じ、※を付して適宜略記した。

一3〜5福星〈上がり〉

鶴と鹿を従えて座しているところ。上空に蝙蝠？

↑　一1・一2・一9・一10・四3

一6～8寿星〈上がり〉
子供たちに囲まれて座しているところ。地を這う亀。
↑　一1・一2・一9・一10・三10
一1彭祖　はうそ　△全（巻一）　△奇　△つ　△図
てっけん山に入り菊水の傍らに座しているところ。
※菊水の件など、『列仙全伝』や『列仙伝』・『神仙伝』になし。『仙人つくし』のみ。
↓　一2・上がり福[1]・上がり寿[1]・一9・一10・四3[3]
↑　一2・一9・一10・二2・二3・二6・二7・二8・二9・二10・三1・三2・三10・四3・四4
一2西王母　せいわうぼ　○全（巻一）　○奇　×つ　△異
漢の武帝に進上する桃を胸の前に持って立っているところ。
↓　上がり福[1]・上がり寿[1]・三10[2]・一10・一1（「二ツアマリ彭祖」）・一9（「一ツアマリ東方朔」）
↑　一1・一9・一10・二4・二6・二8・二10・三5・三8・三10・四3・五2
一9東方朔　とうはうさく　×全（巻二）　△奇　△図
西王母の桃の実を盗んで逃亡するところ。
↓　上がり寿[1]・上がり福[1]・三10[2]・一10（「三ツ余リ張果老」）・一1・一2
↑　一1・一2・一10・二2・二3・二5・二7・二9・三3・三7・三10・四3
一10張果老　ちやうくわらう　×全（巻五）　×奇
手に持った瓢箪から驢馬を出しているところ。

※例えば鳥山石燕『鳥山彦』に、張果老の出した驢馬に鉄枴の出した分身が乗っている絵あり。

↓　一9・上がり寿・上がり福・一2・一1・四3

↑　一1・一2・一9・二2・二4・二7・二8・二9・二10・三1・三4・三6・三7・三9・四5

二1久米ノ仙　くめのせん

雲に乗って飛行中に、洗濯する女性を見下ろしているところ？

※六10浣衣女と視線を合わせているように見える。

↓　六10・二2・三2・二8・二10・二9　　↑　三6・四1・四10・五3・五8・六8・六10

二2費長房　ひちやうはう　　×全（巻四）　×奇　×異

鶴に乗って昇天するところ。

※鶴に乗った費長房について中本大氏論文あり。先に挙げた『久米仙人後日譚』では折鶴に乗る術を授ける。

↓　三10・二4・一10・四3・一1・一9　　↑　二1・二3・二8・三2・三5・三7・四4・四7・五3

二3蝦蟇仙　がません

蝦蟇を背負って水辺の岩上に座しているところ。

※知恩寺所蔵の顔輝『蝦蟇鉄枴図』など知られる。

↓　一1・二2・二8・三5・二10・一9　　↑　二10・三3・三8・三10・四2・五10・六3・六8

二4鉄枴先生　てつかいせんせい　　△全（巻一）　△奇　×図

足が不自由なので鉄の杖をついて、小さな分身を口から噴き出しているところ。

※『列仙全伝』には分身を口から吐き出すという内容なし。

↓ 一10・三2・二7・二9・三7・一2　↑ 二2・二9・三9・四2・四7・四10・六9

二5丁令威　ていれいゐ　○全（巻二）　×奇

霊虚山に入って仙道を学んだのち、鶴と化して帰ってきて、石柱にとまったところ。

↓ 二6・四3・三7・二10・二8・一9　↑ 二10・三1・三4・四1・六9

二6左慈　さじ　××全（巻三）　×奇　×つ　○図

水を入れた盆に釣り糸を垂れて、鱸を釣り上げたところ。

※『絵本故事談』巻一などに同様の絵あり。

↓ 一1・三8・三9・三4・三1・一2　↑ 二5・三2・三6・四1・四4・四5・四8・五7

二7王子喬　わうしきやう　×全（巻一）　×異　×図

七月七日に白い鶴に乗って現れ、その鶴と童子を従えて立っているところ。

↓ 一9・三10・一10・四3・二10・一1　↑ 二4・五2

二8黄初平　くわうしよへい　△全（巻四）　△奇　△異

金華山に入って四十余年、白石を叱ると、すべて羊になったところ。

↓ 一2・二9・二10・二2・一10・一1

↑ 二1・二3・二5・三2・三5・三8・四8・四10・五8・五9・六1

二9呂洞賓　りよとうひん　×奇

剣を背負い、龍の頭の上に立っているところ。

※雪村『呂洞賓図』など知られる。

↓ 一9・二10・一10・二4・一1・五2　↑ 二1・二4・二8・三4・三6・四2・四9

二10琴高　きんかう　△全（巻一）　××つ　○図

弟子たちが　涿水で待っていると、二匹の鯉に乗って出てきたところ。

※『列仙全伝』には鯉が二匹であるという記述ない。ただ、挿絵は、乗り方は異なるが、二匹になっている。

↓ 一2・一10・二5・一1・二3・四3

↑ 二1・二3・二5・二7・二8・二9・三1・三3・三8・三9・四3・四4・四6・五1

三1姮娥　こうか　××全（巻九）

薬草を持った夫の羿と対面しているところ。

↓ 一1・三2・二5・四3・二10・一10

↑ 二6・三5・三6・四2・四5・四6・五7・六4・六9

三2赤松子　せきしようし　○全（巻一）　△奇　◎異　×図

体毛を生やした姿で立っているところ。

↓ 二6・二8・三3・三9・二2・一1

↑ 二1・二4・三1・三7・三9・四1・四7・五3・五7・五8・六2

三3東王公　とうわうこう　◎全（巻一）　×奇　××つ　◎異　×図

王女と楽しんでいた投壺の道具を傍らに置いて、口から稲妻を吐き出しているところ。

↓ 二3・三5・三8・四4・二10・一9　↑ 三2・四9・五2・五4

三4彭宗　はうそう　○全（巻一）　○異　×図

一日中水底に伏しているところ。

↓ 二5・四1・六4・五2・二9・一10　↑ 二6・三8・三9・四2・四9・五9

三5麻姑　まこ　×全（巻三）　×奇

頭の頂きを髻に結い、長い爪を見せて（？）立っているところ。

↓ 一2・三1・五2・二2・四8・二8　↑ 二3・三3・四1・四5・四6・四9・六4

三6黄安　くわうあん　◎全（巻二）　××つ（ただし、絵は欠失）◎図

衣服を身に付けず赤い身体を顕わにしたまま、三千年に一度だけ頭を出すという神亀に乗っているところ。

↓ 二9・二6・三1・三9・二1・一10　↑ 三9・五7・六2・六4

三7呉猛　ごまう　○全（巻四）　○異

白い羽の扇を持ち、白い鹿の引く車に乗って昇天するところ。

↓ 二2・四8・四5・三2・一10・一9　↑ 二4・二5・四8・五4・六1・六2・六7・六8

三8上利剣　しやうりけん

波の上を剣に乗って移動しているところ。

※三代豊国（英一蝶）らの絵あり。

↓ 二8・二10・三4・二3・四4・一2　↑ 二6・三3・四6・五2・五8・六3・六8

三9巨霊人　これいじん

虎を従えて立っているところ。

※『絵本写宝袋』に相当に近似する絵が見える。

↓ 二10|1|・二4|1|・三6・三2・一10|2|・三4

↑ 二6・三2・三6・四2・四4・四10・五1・五3・五9・六9

三10弄玉　ろうぎよく　○全（巻二）　××つ　△図

（龍に乗った蕭史とともに、）鳳凰に乗って昇天するところ。

↓ 一9・一1|2|・一2|2|・二3|1|・四3〜・上がり寿|3|　↑ 一2・一9・二2・二7・四3・ふり出し

四1羅真人　らしんじん　◎全（巻四）　○異

丹を与えて病気を治してやった龍が、観北氷塘にて足を洗っている際に現れたところ。

↓ 三2|1|・四6・二1|2|・三5|1|・二5・二6|2|　↑ 三4・五4・六1・六8・六9

四2劉安　りうあん　◎全（巻二）　○異　×図

八公の手引きによって丹薬を服し、犬・鶏とともに昇天していくところ。

↓ 三1|1|・三4|1|・二4|2|・二3|2|・三9|1|・二9|2|　↑ 四8・五10・六1・六3・六7・六9

四3太真夫人　たいしんふじん　◎全（巻一）　○異　○図

それを弾くと種々の禽獣が飛び集まってきたという一弦の琴を持って、白い龍に乗り周遊しているところ。

↓ 一2|3|・一9|3|・一1|3|・二10|2|・三10|1|・上がり福|4|

↑ 一1・一10・二2・二5・二7・二10・三1・三10・四6・五2・ふり出し

四4黄石公　くわうせきこう　△全（巻二）　△図

馬に乗り橋を渡っていた際に、仕えていた漢の張良が沓を捧げるところ。

↓ 二2|2|・三9|1|・四10・二6|2|・二10|2|・一1|3|　↑ 三3・三8・四7・四8・四10・五9・六3

四5馬師皇　ばしくわう　△全（巻一）　××つ（絵欠失）　△異　△図

病気を治してもらおうと下ってきた龍の口に甘草湯を入れて飲ませようとしているところ。

↓ 三5・三1・二6・六2・六9・一10　↑ 三7・四9・五4・五10

四6林霊素　りんれいさく（ママ）　○全（巻七）　○異

宮殿において法術競べをした際のこと、水を吐くと五色の雲になり、その中に金龍や獅子が現れたところ。

↓ 四3・五10・三8・三5・三1・二10　↑ 四1・六3・六7

四7張志和　ちやうしくわ　◎全（巻六）　○奇　○異

船のように蓆を水上に敷いて行き来し、その上に座って酒を飲んでいると、突然鶴が頭上にやってきたところ。

↓ 五10・四8・二2・四4・三2・二4　↑ 五2・五7

四8曹仙媼　さうせんあう　◎全（巻四）　◎異

渡し守に拒絶されたため、いつも連れている幼女と犬とともに波の上を対岸へと渡っているところ。

↓ 三7・四2・二8・五2・二6・四4　↑ 三5・三7・四7・五4・五7・六4・六10

四9武志士　ぶしゝ　○全（巻八）　○異

青い布の幕を橋のように空中に架け、それに乗って移動しているところ。

↓ 五10・三3・四5・三5・三4・二9　↑ 五1・五3・五10・六7

四10侯先生　こうせんせい　△全（巻七）

夏の日、衣服を脱いで池中に入ると、大きな蝦蟇の姿になったところ。

↓ 四4・三9・五7・二8・二4・二1　↑ 四4・五1・五3・五10

五1葛玄　かつけん　◎全（巻4）

乗っていた船が沈没したため、水上を歩いてもどっていくところ。

↓　五7・四10・六9・四9・三9・二10　↑　ふり出し

五2上元夫人　しやうげんふじん　◎全（巻一）　○図

七月七日、麒麟に乗って、（西王母とともに）漢の武帝のもとに向かうところ。

↓　四3・四7・三3・三8・二7・一2　↑　二9・三4・三5・四8・五10・六2

五3羅子房　らしほう　◎全（巻六）　○異

父に続いて得仙し、門外の高い杉の上から船に乗って昇天するところ。

↓　四9・三2・四10・三9・二1・二2　↑　六2・六7・六8

五4列子　れつし　××全（巻一）

九年間の修行の成果あって、風を操り、それに乗って移動しているところ。

↓　四5・六7・四8・四1・三3・三7　↑　ふり出し

五7趙真人　てうしんじん　◎全（巻五）

川を決壊させる毒蛟の頭を左手でとらえ、右手には剣を持って水中から現れたところ。

↓　三6・四8・三2・三1・四7・二6　↑　四10・五1・六1・六2

五8梅福　はひふく　◎全（巻三）　△奇　○図

飛鴻山にて修煉し丹が成ったあとのある日、空から下ってきた鸞に乗って昇天するところ。

↓　五10・三8・六3・三2・二8・二1　↑　ふり出し

五9葵女仙　さいちよせん　◎全（巻二）　○異　△図

老父に請われて二羽の鳳凰を刺繍し、老父に見せているところ。

↓ 二8・六8・四4・六4・三9・三4　↑　ふり出し

五10欒巴　れんは（ママ）　◎全（巻三）　○図

正月一日、成都の火災を消すため、皇帝から賜った酒を飲まずに、西南方に向かって吐き出しているところ。

↓ 四9・四10・四5・五2・四2・二3　↑　四6・四7・四9・五8・六7

六1諶母　たんほ　◎全（巻四）　◎異

天に昇るに際して香茅の穂を南の方に向かって投げているところ。

↓ 四1・四2・六9・五7・三7・二8　↑　六4

六2姚光　てうくわう　◎全（巻三）　○図

柴数千束を積んだ中に座し、四方から火を付けられても、焼かれないでいるところ。

↓ 五2・三2・三6・五3・五7・三7　↑　四5

六3毛女　まうじよ　△全（巻二）

それを食することによって飢寒を感じず身体が飛ぶように軽くなったという松葉を持って立っているところ。

↓ 四6・三8・六8・四2・四4・二3　↑　五8

六4韋善俊　ゐせんしゆん　◎全（巻五）

「烏龍」と名付けて飼っていた黒犬が黒い龍となり、それに乗って去っていくところ。

↓ 六1・三5・四8・六7・三1・三6　↑　三4・五9

六7子英　しえい　○全（巻三）　××つ　△異　○図

釣り上げて池中で一年間飼っていると角と翼が生えて大きくなった赤い鯉に乗り昇天するところ。

↓ 四9・四2・五3・四6・五10・三7　↑ 五4・六4

六8張九哥　ちやうきうか　◎全（巻七）

うすぎぬを重ね畳んで切ると、蝶の姿になって飛んでいったところ。

↓ 四1・五3・三7・三8・二3・二1　↑ 五9・六3

六9陳南　ちんなん　○全（巻八）　○異

船が出ず、浮かべた笠に乗って水上を渡るところ。

↓ 三9・四1・四2・二5・三1・二4　↑ 四5・五1・六1

六10　浣衣女　くわんいぢよ

川で洗濯しながら左手斜め上方を見ているところ。

※二1久米ノ仙と視線を合わせているように見える。

↓ 二1・四8　↑ 二1

五56六56　ふり出し

亀に戴かれた蓬莱山、鶴、太陽。

↓ 四3・五8・五4・五1・五9・三10

（本学教授）